

# 第 13 回

## 世界オリエンテーリング選手権大会

### 報 告 書

1989年8月14日～20日

SWEDEN : SKARABORG

# ご あ い さ つ

## 第13回世界選手権大会

日本チーム団長 船橋昭一

一昨年のフランス大会に引続き、今回のスウェーデン大会にも日本チームのために120余名の個人、団体の方々より多額の賛助金をおよせいただき、選手団一同厚くお礼申し上げます。およせいただいた賛助金は、SQUADからの資金援助と合わせまして貴重な遠征資金として活用させていただきました。

今回の日本チーム選手決定につきましてはすでに皆様ご存じの通り、自主組織であるWOC SQUAD JAPANの自主管理で進めたものです。88年度を通しての1次セレクションそして89年度に入ってからの2次セレクションを経て10名の選手を決定いたしました。これに役員4名を加え、JOLCの了承を得て選手団を決定、チーム派遣をみたものです。選手・役員の選考は将来JOAの内部機関により実施されることを願っております。現在の状況はそこに到る過程と見ます。ともあれ、一連のセレクションの過程で世界選手権をめざすエリート選手の間の良い意味での競合の状態が生まれ、選手選考の方法は評価できるような方向に進んだといえます。

さて、世界選手権は個人・リレーとも男子はノルウェー、女子はスウェーデンと金メダルを分け合い、共に王者の貫禄を見せました。日本チームは出発前、3回の国内合宿、そして1週間にわたるトレーニングキャンプを経て、世界選手権に望みました。各選手とも日本からの激励の便りに加え、はるばる日本から世界選手権会場においでいただいた日本人オリエンティアの大きな声援のもとで、力一杯走ることができたことは特筆に値します。35名を越える応援の方々には厚くお礼を申し上げます。このように大勢の方々の励ましを受けて、日本チームは世界選手権に望むことができました。個人戦では村越選手が予選を通過、リレーでは男子が19位に入るなど見るべき結果があったといえます。これに対して、女子は他国選手の走る速さの壁に苦しいレースを強いられ、リレーでは制限時間を越えて失格になるなど、いま一步及びませんでした。女子チームは制限時間内で完走するという新たな課題を負うことになりました。

次の世界選手権は1991年チェコスロバキアにおいて、さらに1993年はアメリカで開催の予定です。1995年はデンマークが誘致キャンペーンを始めています。今回の日本チームの多くの経験を今後の選手育成に生かす努力は当然行われなくてはなりません。そのためにもみなさんのより大きなご理解とご協力をお願いする次第です。報告書をお届けするにあたり、心暖まる賛助金をおよせいただいた各位に対し、あらためて日本チーム代表としてお礼を申し上げます。また、日本チーム派遣につきまして、派遣依頼状の送付等お力添えをいただきましたJOLC時田政之氏、白幡貞美氏に対してお礼を申し上げます。さらに、世界選手権事務局とたびたびの事務連絡にお力添えをいただいた田口肇氏、そして、国内合宿において惜しみない支援をいただいた多田正純コーチ、石井龍男氏、国内合宿からトレーニングキャンプまで支援をいただいた佐藤信彦氏、賛助会員の募集集計を一手に引き受けてくださった小山格氏の各位に対しても厚くお礼申し上げます。

## 目 次

日本選手団名簿・日程 .....	1
会計報告 .....	1
トレーニングキャンプ	
トレーニングキャンプ（女子）について .....	(藤井 範久) --- 2
レースの周辺	
本場スウェーデンのオリエンテーリングをとりまくもの .....	(有村知江子) --- 2
女子チームの様子 .....	(新沢 祐子) --- 3
男子チームの様子 .....	(稲葉 英雄) --- 4
マネージャーの仕事 .....	(村越 久子) --- 5
個人予選	
個人戦予選観戦記 .....	(吉田 勉) --- 6
個人戦予選 .....	(深田 幸子) --- 7
予選レース .....	(有村知江子) --- 8
私が予選を走ったら .....	(竹内 藤雄) --- 9
予選に参加して .....	(稲葉 英雄) --- 10
B-ファイナル	
B-ファイナルについて .....	(橋 直隆) --- 11
B-ファイナル完走記 .....	(木植 早生) --- 12
B-ファイナルに参加して .....	(山岸 倫也) --- 13
個人決勝	
個人決勝レース観戦記 .....	(出田 祐子) --- 14
個人決勝 .....	(新沢 祐子) --- 15
決勝レース .....	(村越 真) --- 16
リレー	
リレー観戦記 .....	(深田 幸子) --- 18
フジオくんのリレー観戦記 .....	(竹内 藤雄) --- 19
リレーを走って .....	(出田 祐子) --- 21
男子リレーについて .....	(吉田 勉) --- 21
総括	
スタッフとして世界選手権に参加して .....	(藤井 範久) --- 23
女子コーチとして .....	(山岸 倫也) --- 23
男子コーチとして .....	(村越 真) --- 24
ヘッドコーチとして .....	(橋 直隆) --- 25
資料	
個人予選成績表 .....	28
個人決勝・Bファイナル成績表 .....	30
リレー成績表 .....	32

## 日本選手団名簿・日程

### 日本選手団名簿

選手	出田 祐子	
	木植 早生	
	新沢 祐子	
	有村知江子	
	深田 幸子	
	山岸 倫也 (女子コーチ兼任)	
	村越 真 (男子コーチ兼任)	
	吉田 勉	
	稲葉 英雄	
	竹内 藤雄	
	役員	船橋 昭一 (団長)
		橘 直隆 (ヘッドコーチ)
		藤井 範久 (コーチ)
村越 久子 (マネージャー)		
佐藤 信彦 (キャンプのみ)		

### 日本選手団日程

8月	6日	選手役員集合
	7日	トレーニングキャンプ地へ移動
	8日	トレーニング
	9日	トレーニング
	10日	休養
	11日	トレーニング
	12日	トレーニング
	13日	トレーニング、キャンプ終了
	14日	世界選手権宿舎へ入所
	15日	個人戦モデルイベント、開会式
	16日	個人予選
	17日	個人B-ファイナル
	18日	個人決勝
	19日	リレー・モデルイベント
	20日	リレー、閉会式、選手役員解散

## 会計報告

### 支出

世界選手権エントリーフィー (含・宿舎費)	756,350円
宿泊費・食費 (トレーニングキャンプまで)	546,952円
交通費 (レンタカー等)	149,206円
トレーニング用地図	43,400円
ユニフォーム (含・トリムテックス)	305,348円
雑費 (葉書、調整用一般大会参加費、手数料等)	44,707円

---

計 1,845,963円

### 収入

賛助会費	1,232,090円
参加者個人負担	300,000円
SQUADより	313,873円

---

計 1,845,963円

☆平山氏より救急薬品等をいただきました。

☆渡航費および集合前解散後の経費は個人負担です。

☆10月1日以降の収入 (予備トリムテックス販売等) はSQUADに繰り入れます。

## トレーニングキャンプ（8月8日～13日）

### トレーニングキャンプ（女子）について

藤井 範久

今回のトレーニングキャンプは8月8日から6日間の予定で始まった。宿舎はSt. Olofという民宿のようなホテルで、我々がトレーニングで使用した汚いトリムやレガースを洗ってくれたり親切このうえない宿舎であった。また、この宿舎からトレーニングテラインまでは2台のレンタカー（9人乗りのミニバス）を使ったため非常に自由に行動できた。

トレーニングキャンプは、前半の2日間をゆっくりしたペースで地図と地形のイメージを合わせることに重点を置き、1日の休養日を入れて後半の3日間をルートプランニングを中心にポイントOLを交えて、少しスピードを上げながらテクニカルなトレーニングを行った。

実際のトレーニング内容については、初日は地図と地形のイメージを合わせることを目的として、比較的地形の簡単なテラインを各自のペースで回り、午後はやや細かい地形のテラインを回った。

2日目の午前中には、個人戦に参加する4名のメンバーを決めるための資料を得るためにショートレースを行った。その結果とそれまでの経緯を加味して出田を除く4名が個人戦に参加することになった。（出田はリレーに参加が決定）

3日目、チームとしては休養日とした。ある者は遊園地へ行きジェットコースターに乗り、またある者はジョギングをした後サウナに入って汗を流したり、ショッピングを楽しんだ。

4日目、キャンプは後半に入りテクニカルなトレーニングへ移行していった。コントロールピッキング+ルートプランニングのトレーニングを行い、午後は2.5kmほどのコースを2回走った。ある者はルートを変えてみたり、またある者は1回目はゆっくり2回目はスピードを上げてといった具合である。このトレーニングが終了したところで女子選手は全員スウェーデンのテラインによく対応できるようになったと思われる。一人調整が遅れていた出田にしてもこのトレーニングが終了した後は、それまでと見違えるほどの自信をつけていた。

5日目、女子コーチである山岸が女子選手全員を連れて技術的なアドバイスをしながらテラインを回り、午後はそれまでのトレーニングの仕上げとしてポイントOLを行った。このポイントOLでは選手全員がキロ当たりタイム9分前後を出しており、この結果から個人の予選通過も可能であると思われた。

最終日、ポイントOLを行い、トレーニングキャンプを終了した。全体を通じて、選手の自主性に任せ短い時間で集中的にトレーニングを行うことを心がけた。（3時頃には宿舎に戻っていた）その結果女子選手全員がスウェーデンのテラインによく対応できるようになり、予選通過も可能ではないかと僕は思っていたのだが・・・。

## レースの周辺

本場スウェーデンのオリエンテーリングをとりまくもの

有村 知江子

オリエンテーリングがスウェーデンで発展したのは何故か。その問いに対する解答があらゆる方面から与えられていることが今回の遠征で実感された。スウェーデンの国土はノ

ルウェーの国境付近を除いて、概して平坦であり、広大な針葉樹の林が続いている。もちろんその林は道路や鉄道でいくらかは分断されているが、その中を人の足だけで目的地に行くには、目標物となるものが少なすぎる。そこには正確な地図とコンパスが必需品となってくる。こうして軍隊の訓練に関連して生まれたオリエンテーリングは、抵抗なく市民スポーツとして受け入れられたのであろう。

日本でOL大会を行う場合の条件として、テラインの植生状態と斜面の角度に規定される競技面を優先するか、交通の便などの運営面を重視するかが問題となることが多いが、スウェーデンの南部に関してはそれで悩むことはほとんどないと言っていいだろう。もともと植生が針葉樹林帯に属しているうえに、林業が盛んなために手入れのゆきとどいた林が多い。ただ、人の手が奥深くまで入っているので時には広大な伐採地や植林地にぶつかってしまうこともあるが。気候も雑草が生い茂るには寒すぎるため、オープンでもあまり植生が悪くならないのである。

また、人々は自動車で大会に参加することが普通だし、会場周辺に駐車場を設けることはいとも簡単なことのようにだ。もともと会場が草原に設定されるのだから、駐車するスペース分の草原があれば良いわけだ。しかも、ここには渋滞という言葉がない。いつでも予定通り車で移動できる。だから参加者の交通の便等を考慮に入れる必要がないので、テライン開発は比較的自由に行えるように思われる。参加者は、その大会が遠い場所で行われるときは、バカンスの一環としてキャンピングカーで乗り出す。6年前にオーリンゲン大会が終わった直後に何千台というキャンピングカーが四方に散っていく光景を目のあたりにして、うらやましくてしかたのなかったことを思い出す。

夏は日照時間が長いために、ナイトではないナイトOLも楽しめる。トップスタートが夕方5時などという大会もあるくらいで、仕事が終わった後OLで汗を流すなんてこともできるわけだ。

このように、オリエンテーリングは完全に市民権を得たスポーツとして発展してきている。日本で野球が広く普及しているように子供の頃からオリエンテーリングに接する人口も多く、その中からは素晴らしい選手として育ち得る人々も数多くいるだろう。みんなのスポーツとしても、そして世界のトップレベルを争う競技としても、ともに共存できる条件をスウェーデンはほぼ満足いくほどに満たしている。

地理、気候、産業、そして人々の理解と興味……。マラソン大国の日本で、何故本格的なランナーがオリエンテーリングに興味を示してくれないのか。この問題の答えは、数多くの条件を比較することによって初めて得られるだろう。そういった条件の壁を乗り越えて新たな発展を進めなければいけない時かもしれない。

## 女子チームの様子

新沢 祐子

今回の女子チームについて特筆すべきことは、なんと言っても世界選手権に女子が参加するようになって初めて、5人のメンバーが揃ったことだろう。この初めての状況の中で迎えたWM89での女子チームの様子を振り返ってみる。

### ①個人予選出場者の決定

5人メンバーということは、必ず個人戦あるいは団体戦を走ることが出来ない者が存在するということである。この出場者の決定は、個人に関してはトレーニングキャンプ2日目に、リレーに関しては個人戦の成績を見て決定することが、日本で申し合わされていた。レース直前まで出場者が決定されないため、緊張感が長く続きすぎる等の弊害が懸念されたが、逆に、日本では闘争心を示すことの少ない私達にとっては、すばらしい刺激になっ

たようだ。特に5人とも大きな力の差がない私達は、お互いを良いライバルとして見ることができた。トレキャンプも開始と同時に気合いが入り、なるべく早くこのテラインに適応しようとみんな必死だった。(だからといってトレーニング以外でもお互いにらみ合っていたというわけではない。トレーニング以外ではリラックスするに十分な雰囲気を持っていた) こうした中、出田がリレーのみの出場と決定した。その日から、出田は藤井コーチと共にリレーに標準をあわせたトレーニングを始め、その他のメンバーは「出田の分も」という思いを抱いていた。

#### ② トレーニングキャンプ→個人モデルレース

トレキャンプからモデルレースまでのトレーニングは、ほぼ成功したと言えるだろう。目標としていた「地図とテラインの適応」を各人のペースで達成したと感ずることができたからだ。個人モデルレースに至っては、みんな“ごきげん”だった。スウェーデンのテラインを好きになっていた。そして「私達の力でもなんとかかすることができる」と信じ込むことができていた。出田も一般参加レースD21AKで優勝し、出田のみならず他の4人にも大きな自信となった。

しかし、この間に女子選手の問題点(もしかしたら私ひとりの問題点だったのかもしれないけど)が現れたような気がする。トレキャンプに入って男子選手が自分なりのトレーニング計画をたてているのに対し、女子選手はそれができないのである。技術面の問題点の洗い出しはなんとかできて、それに対する策がたてられない。さらに、自分をどのように追い込んでいけば、本番にベストコンディションで臨めるのかわからないのである。結局、コーチに頼ってしまう以外に方法はなかった。

#### ③ リレーメンバーの決定

リレーメンバーの決定に際し、評価されるのは有村である。彼女は、日本における話合いでいったんはリザーブの話が持ち上がっていた。そのせいか、彼女のリレーに執着する気持ちは他の誰よりも強かった。彼女がそうした気持ちをB-ファイナルにぶつけ、立派なレースをしたことは他のメンバーにも良い影響を与えた。個人予選、B-ファイナルの結果などから深田がリレーのリザーブとなった。

#### ④ リレー

みんなが「自分のレースをしよう」と心に決めレースに臨んだ。そして「アメリカやユーゴには勝ちたい」とみんな考えていた。結果はともかくとして、4人の気持ちは同じ方向を向いていた。

いま、私達はあまりにも大きな世界の壁にぶつかって茫然としている。しかし、茫然としているだけでは何も進歩しない。この大きな壁にいかにか立ち向かうべきなのか、今回の結果を否定することなく、その方策を探し出していくことが急務である。

#### 男子チームの様子

稲葉 英雄

今回の男子チームは、選手5人にトレーニングキャンプの時のみ佐藤信彦が加わっていた。トレキャンプの部屋割は、村越が新婚夫人と同室、年長の山岸と割合神経質な吉田がそれぞれ一人部屋、そして稲葉・竹内・佐藤の25才組が三人部屋であった。トレキャンプの初めの頃は、ノルウェーでの堅い床の雑魚寝・自炊生活などにより、山岸・竹内は疲れ気味であったが、山岸はあえて疲れのピークを持ってきているところだったし、竹内はキャンプの終わりごろにはいつの間にかすっかり元気になっていた。今回のトレキャンプは日程的に余裕があったために、トレーニング後サウナに行ったりトランプをしたり、ま

たオフの日には近くの遊園地に行ったりして、フランスの時と比べるとはるかにうまくいっていた。洗濯をホテルの優しいおばさんが全部やってくれたのも非常にラッキーであった。世界選手権の宿舎に移ってからは、全ての部屋が二人部屋であり、村越と稲葉、山岸と吉田、竹内と藤井という部屋割であった。これもまた妥当な部屋割であったように思われる。（部屋割はマネージャーの苦心の結果です。編集者註）

この世界選手権期間中の暇な時間は、村越は「キルプの軍団（大江健三郎著）」に関する原稿を書いたりOLに関する本を読んだりしてマイペースで過ごしていたし、稲葉は村越の言葉に乗せられて140枚の絵葉書をひたすら書いていた。また、山岸と吉田は相変わらず二人で楽しい時(?)を過ごしていたし、竹内は音楽を聞いたり本を読んだりテレビを見たり屋内プールに入ったりしていた。（一方、橘さんはお呼びの多いマッサージで大忙しのような様子だった）

このように5人ともだいたい元気であったが、吉田が腰と両足首おまけに左手の小指を痛めており、やや心配された。だが、前回の経験や世界選手権のベテランかつ良き先輩である山岸と同室であったことなどもあって、なんとかうまく乗り越えることができたようだ。

また、誰が個人戦を走り誰がリレーを走るかという問題も、チームのためにあえてリレーのみの参加を申し出た吉田の進言により（初出場の稲葉と竹内を個人戦に出した方が緊張が和らぐという考えから）、個人戦は吉田以外の4人に決まり、リレーは竹内と稲葉の予選の結果を見てどちらかが補欠になることになった。そして、その後稲葉が走ることになり、今までの実績から言ってもほぼ妥当な結果となったのである。女子に比べると全くわだかまりも残らず、チームワークはすばらしく良いものになった。

男子チームに限って言えば、今回の選手5人全員が（稲葉は役員、竹内はプレスであったが）フランスでの失敗を自分の目で見ており、同じ失敗は決して繰り返さないぞという気合いがあった。これが成功の一番の原動力なのかもしれない。

## マネージャーの仕事

村越 久子

“マネージャー”の仕事？ 実際は何をするものかよくわかってないまま、名前はなかなかいいなあ・・・と思っていた私でした。だから橘氏に“洗濯とか・・・”と脅かされて少々ショックを受けていたのです。“何をするんだろう？ 何をしたらいいんだろう？”と知っているうちにWMはもう目の前に来てしまい“競技・トレーニングは選手とコーチのやることだから、それ以外のことがうまく運ぶように、また、みんなに雑多な負担がかからないように、オリエンテーリングに集中できるようにしよう”これが私の仕事だと心に決めました。

I O Fの89年WMルールブックにチームマネージャーの規定があります。自分のやってきたこととそこに規定されている仕事の内容がほぼ同じだったので安心するとともに、チームの中にマネージャーが必要なこと、重要な役割を果たしていることを改めて認識しました。実際の仕事としては、現地での会計全般、主催者とのコンタクト、メンバーへの伝達、宿舎との交渉、賛助会員へのはがきの下準備、ユニフォームへのエンブレム付け・・・仕事ぶりに波があったことを反省しています。

今後の問題として“チームマネージャーの仕事はいつから始まるのか”があります。私はトレキャンプ開始時からと思っていましたが、それまでに済ませているエントリー手続きやトレキャンプの予約等の引き継ぎをまったくしていなかったため、いくつかとまどうことがありました。たしかに、私は6月末という早い時期に出発していますが引き継ぎが



できない時期ではありませんでした。チームマネージャーになることが決まり次第、世界選手権に関することはすべて関わっていくほうがよいと思います。エントリーについては実務はしなくてもどのようにしてあるのか情報を持っておくべきであるし、トレキャンプも“行ってみなければわからないし、行けばなんとかなる。とりあえず・・・”から（こういう面はある程度仕方のないのかもしれませんが）、“チームとしてはこうしたいので・・・”を早めに決めてから申し込むと、マネージャーは過ごしかたについて作戦を考えていくことができると思います。

マネージャーをやってよかったと思うことはたくさんありましたが、一番よかったことは、S O F T（スウェーデンO L 連盟）主催のパーティーに出席したとき、スウェーデンO L 未来委員会長がこんな話をしてくれました。“他のスポーツでこんなパーティーをしたり会議をしたりするとき、出席者はほとんど男性だよ。でも見てごらん、このパーティーは結構女性がいるでしょう。I O F の仕事も6：4の割合で女性が活躍している。これは素晴らしいことだと思う” また、最初のマネージャー会議の時にはハンガリーのサロルタ・モンスパルトが“女性は私とあなたとオーストリアの3人ね。でも3人もいるわ。貴重な3人よ”と言っていました。私は自分のできること、やりたいこととしてマネージャーになったわけですが、それが“オリエンテーリングは女性も十分活躍している進んだスポーツ(?)”の一助になっていたとは、とてもうれしいことでした。

## 個人予選（8月16日）

### 個人戦予選観戦記

吉田 勉

予選は参加国の増加によって個人レースの競技の公正さの確保が困難になった為、83年のW M から行われているものです（オーストラリアの時は準備不足で行われなかった）。A、B 2つのグループよりそれぞれ上位25名と、一人も決勝に残れなかった国から予選で一番順位の良かった1名が個人戦を走ることができます。予選には、各国男女それぞれ4名まで出場でき、これをAグループでスタート時間の早いもの（第1グループ）、スタート時間の遅いもの（第2グループ）、Bグループでスタート時間の早いもの（第3グループ）、スタート時間の遅いもの（第4グループ）に分けてエントリーします。日本のように、予選に何人通れるかということを目的にする国にとっては、どこに誰をエントリーするのも目標達成の大きな要因になります。今年の日本の布陣は、男子は第一グループから竹内、村越、山岸、稲葉、女子は深田、木植、新沢、有村となりました。15日は午前中のモデルイベント（個人戦のスタートの様子、コントロールの置き方、森の様子などを見ることができる）の後、午後3時よりスタート順抽選会が行われ、この様子はホテルの全部屋に有線テレビ中継されました。さいわい日本は、特別早いスタートも遅いスタートもなく比較的よいスタート順をひきました。

明けて16日。天気は上々です。選手たちはスタート時間にあわせてバスでスタートへ送られて行きます（なんと正確に送り届けるためにボリスのバイクが先導していたそうです。もちろん信号もバスです！）。僕は、他のバスでゴールへ向かいます。

ゴールエリアにつくと、予選というのに多くの人が見物にきています。会場には中間タイムが表示され、この時点で予選を通過できそうもない選手がほほわかります。最初に表示された日本選手の間は山岸の43分で、これでは全然駄目です。深田40分、これも無理です。既に男子のトップは67分、女子は53分でゴールしていて、男子のボーダー

は77分、女子は70分ぐらいになりそうです。予選通過がほぼ確実な国の選手たちのゴールはゆっくりしたものです。それに対して、自分が予選当落線上にいてと思っている選手たちは、1秒を稼ぐために必死でゴールしてきます。

村越の中間が出ました。3.3分。これは十分予選通過の可能性ががあります。現在は27位くらいですが、ここでは1分間に10人程度がひしめいており、ワンミスが命取りになるところです。木植の中間が出て、可能性が村越1人に絞られました。

74分台で村越がゴール、これなら十分、それもよい順位で予選を通過できると確信しました。本人もどうやら会心のレースだったようです。

結果は予選通過は村越一人でした。順位は21位で、決勝でもいいレースが期待できます。(しかし、このタイムでも、1分半遅ければ予選落ちです) 残りの男子は3人とも90分を超えて、問題になりません。女子は34位の新沢が最高で、決勝を走ることとなりました。(タイム的には深田の方が早かったのですが、今年は男女ともA・Bコースに差があり、Aの方が幾分速く走れたようで、それがボーダーのタイムにも出ています)

男子で村越が予選を通過したことは、オーストラリアが1人しか予選通過者を出せずニュージーランドを含めて8カ国が全員予選落ちしたことを考えれば、かなり評価していいものと思います。しかし、振り返れば、日本で村越に5分以上差をつけられている他の選手が予選を通過できる可能性は万にひとつもなくなっただけでなく、見なくてはならないでしょう。今回屈辱を味わった国々はさらに力をつけて次回のWMに臨んでくると思われ、村越打倒というのがかけ声だけでなく行動を伴ってこない限りは、状況はより厳しいものとなるはずで、(逆に言えば、村越という明確な目標を持っていることを僕らは喜びとしなければなりません)

女子については、より厳しいものがあります。こちら6カ国が全員予選落ちになっていますが、最高位が34位と言うのは他に比べても悪く、走力差が歴然と出てしまったということです。しかし、原因はそれだけではないと思います。今回の目標はミスをしないということで、全般的にみて(男子を含めて)消極的なレースが目だったように感じます。慎重になりすぎる事によって、スピードが落ち、ボーダーとの差が予想以上(もちろん実力以上)に出てしまったのではないのでしょうか。現状を考えると、特に個人予選に関しては、常に攻めの姿勢でレースに臨まない限り、予選を通過できないことは言うまでもなく、予選に出場することさえ無駄になりかねないと思います。

最後になりましたが、女子について肯定的な材料が全くなかったわけではありません。木植の中間35分というのは、予選通過はできないまでも30位ぐらいには入れるタイムです。ミスをした直後だということを考えれば、“予選通過の可能性はそこにあった”ということはいえるのです。

## 個人戦予選

深田 幸子

7:00のバスに乗りスタートへ向かう。昨日と同じで白パイが先導して行く。バスを降りスタート地点へ行くが、まだ2時間もある。暇なのでボーッ座って音楽を聞いたりする。1時間前にテーピングをして、のんびりとウォーミングアップ。いよいよ自分の名前が呼び出し板にかかり、プレスタートへ行く。少々あがっているが、自分としては特に悪い状態とは思えない。プレスタートから本スタートへ。思ったより遠かった。チャイムを待つ。いつもこの本スタートでの待ち時間は落ち着かない。地図を取ってスタート。1番までは慎重にとアタックに道を使う。

とにかく足が重い。息があがるわけでもないのに足が前に進まない。ルートを決めるの

に時間がかかる。自分のいる位置に自信が持てない。別に他の事を考えているわけでもないが、なんだか雲の上を歩いているようなフワフワした気分でOLをしている。そしてフワフワしているうちにレースが終わってしまった。

個人戦予選、このレースのために準備してきたのに、終わった後のすっきりしない気分はなんなのだろう。足を高くあげる走り方ができないため、すぐ足元の木に引っかかって思うように前へ進めない。日本ではいつも自信を持って道回りルートをとっていたのに、直進の方が速いのでは？と思って途中で直進に切り替えてしまい、アタックを難しくしてしまう。気がせくのかルートを読む余裕を失っていたのか、つい直進ルートを選んでしまう。道走りを得意としていたのに……。小さなミスをして大きくロスしたとあせったり、実際は大きいのにそれが実感できなかったり、何分くらいのミスだったのかわからない。予選をぎりぎりでも通過している選手が、実際どのようなスピードやルートでOLをしているのか具体的にわかっていれば、このように相手の様子がわからずに怖がってしまわずにすむのかも知れない。レース中自分の状態が評価できなくなっているから不安になってしまう。でも、いくらミスをし引いたとしてもあと13分も縮めることができるのだろうか。今の日本の女子のレベルで可能なのだろうか。私は可能だと思う。思いたい。もちろんもっと林の中を走れる力をつけなくてははいけません。でも頑張れば、気持ちのいいレースができれば、届かない距離ではないと思うのです。

## 予選レース

有村 知江子

個人戦の目標はもちろん予選通過でした。前回のフランスでのボーダーは、私達がほぼベストで走ればひっかかるかもしれない所があると聞いていたので、その可能性を目指して頑張ろうと思っていました。トレーニングキャンプで何回かテラインを走るうちに、等高線が丸々しているような地形も怖くなくなり、線状特徴物を有効に使ったスピーディーなOL感覚が身につきました。そして、テラインを走ることが本当に楽しくてしかたがないという最高の状態に持っていきました。

予選が近づくと、目標をもっと明確なものに設定することが必要に思えてきました。漠然としたものだけではここぞという時の底力の原動力になりにくいのです。そこで、やはり身近なライバルである日本選手とのレースであることも強く意識してみました。リレーの選手枠と個人決勝出場枠1名（全員予選落ちしても最高順位者が決勝に出られる）を目指して……。日本の選手を相手に考えた方が、より一層緊張が増しました。不思議なものです。しかし、目に見えないものと競うことには変わりがないので、結果的には自分自身との勝負という心構えで臨みました。甘いものをちょっと多めに食べて、あれだけ食べたのだから、苦しい時にも走らなかつたら許さないと心に言い聞かせたわけです。もうこの段階では、ノーミスでまわることが大前提で、あとは走力に頼ることになるということが当然のことだったのです。

前日まではスタートの瞬間をイメージしては気持ちを盛り上げることを繰り返しましたが、当日はできるだけ緊張しないように移動中も準備中も他のことばかり（例えば歌謡曲の歌詞を口ずさむ）考えたりしていました。ひとりひとり仲間のスタートを見送るたびにプレスタート位置に近づいては緊張し、遠ざかってはリラックスすることを繰り返しながら、静かに闘志がわくベストの状態に持っていこうとしました。そして自分のスタートの時点ではもう何も意識しない落ち着いた状態となり、自然にレースに入って行けました。レースは、これまでのトレーニングテラインとは大きく異なった日本的なテラインで行われました。これまで築いたスピーディーなOL感覚がどんどん失われ、保守的な展開にお

さまろうとする自分がそこにありました。

結果的には自分に勝つことが出来なかったわけですが、世界の壁はそんなこととは無関係に高いものでした。今の私がどんなにベストのオリエンテーリングをやっても、あのボーダーラインは通過できないと思います。私達日本女子エリートは、ここ数年でずいぶん速くなったと自負していました。しかし、世界のスピードレベルは、それ以上の急角度で上昇していたのです。あらためて、これからの日本女子オリエンティアはどうするべきかと考えさせられてしまう結果だったと思います。

翌日私は、予選落ちした30名とB-ファイナルに出場しました。私の中には、昨日勝てなかった自分へのお返しだということで再度の挑戦という意識がありました。結果的にこのレースでは気持ちよく走れ、自分にも勝てたと思える成績が出せました。それにしても世界のレベルは高いと何度も実感させられるレースでした。

私が予選を走ったら

竹内 藤雄

予選を走り終えた私の頭の中には「つらかった～」「しんどいよ～」「もうやだ～」等のわけのわからない単語がいっぱいつまっており、レースについての反省やら考えを整理するなど不可能な状態であった。しかし、そのボーッとした頭を持ちながら村越さんのゴールを待っていた。やがて、村越さんの6分後スタートのケント・オルソンと3分後のデンマークの選手がゴールレーンに入ってきて、その30秒ほど後にShin Murakoshiの姿を見た。そしてその時、私は自分の目指している山が想像よりも高かったことに気づくことになった。正直な話、その姿の方が自分自身のレースよりも印象に残っている。

自分のレースを振り返って、犯したミスの原因とその対策について考えてみたい。まずスタート前について、今回の目標はとにかく「自分なりのレース」を完全に行うことであり、そのためにレース前はできるだけ自分自身を「普通」の状態にしておくことに重点を置いた。結果として（あくまでも伝聞だが）普通ではなかったらしいので失敗であった。原因はスタート前の雰囲気にも飲まれてしまったからであろうし、対策としては、普通にやるのが無理ならば逆に普通でない状態をコントロールできるようになるか、レースを絞って集中できるようにするかのどちらかである。これが第1の課題である。

スタートで地図を見た瞬間、このテラインが私の想像とはほど遠いことに気づいた。ここでやるべきことは、それならそれで素早く頭を切り替えることであったのだが、うまくいかなかったようである。1番でのミスが3番までのミスの引金となってしまったようで、わずかに3コントロールを終えた時点で6分後スタートのランナーを見ることになってしまった。こうなると精神的にはズタズタになり、なぜか身体も鉛のように重く感じられた。なんとか自分のペースを取り戻そうと、ロングレグでの長い道走りのルートチョイス等をこころみしてみた。その結果大きなミスはなくなったものの、ミスを怖れるあまり今度は走りのペースが極端に落ちてしまい、結局ペースを上げることができないままゴールすることになってしまった。不完全燃焼もいいところだが、あまりにも情けなくて自分自身を怒る気にもならなかった。テラインそのものは北欧的というよりもむしろ日本的な植生や地形であったし、コースも決して難しいといった類ではなくむしろ易しいといえたので、スピードに乗れなかったことは私にとって致命傷となった。

他の国の選手との走りでの一番の差は、私が徐々にペースを上げようとしたのに対して、最初からガンガン飛ばしていたことである。つまり私の予選に対する認識の甘さを示している。特にボーダーラインの選手にとってはチンタラ走っている場合ではなかったわけだし、最初からスピードを上げてオリエンテーリングをできるような状態にすべきであった

わけである。レース後に計算すると、私が普通のペースでチンタラ走った場合、ロスタイムがまったくない完璧なレースをすればかろうじて予選通過ギリギリのラインになることがわかった。うらがえせば、今のペースで走っているかぎり予選通過は不可能であるということである。

ならば、今後どうすべきなのか？ 今回に限らず、欧州のオリエンテーリングとはガンガン走ってその限界状態の走りの中で秒差を競う競技である。これが本来のOLの姿であろうし、このようなオリエンテーリングができるようにならなければ、いつまでたっても欧州人と競り合うことはできない。そういった意味で一番ヨーロッパスタイルの走りに近いのは千葉のテラインであろう（むろん富士あたりも同様と思うが）。しかし、今の日本の傾向としては単なる道走りのものを好まず「テクニカル」なものが好まれるし、ほとんどの大会のコースではむしろスピードを出せないコースプランニングがなされている。21Eでさえ単なるツボり合いになってしまっているケースも多い。プランナーの考え方として、「エリートコース＝むずかしくてウネウネしたコース」という公式がある。しかし、易しいコースであったとしても、それを最高のスピードで走ろうとすれば非常に難しいレースとなるであろうし、そういった自己のMaxペースで秒差を競い合うものの方がより進歩的ではないだろうか。

少々脱線してしまったようだが、今後WMやW-Cupで日本人選手が活躍するためには、2・3人あるいは10人程度がワイワイやるよりも、エリートクラス全体を世界の流れに乗せることが必要である。これからのエリートコースは「より長く！ よりスピーディーに！」がテーマであろう。走れない人間がエリートクラスに存在する必要はないし、ましてや勝つなんて事はあってはならないことである。私の91年へのテーマはまずそこに持って行きたいと思う。答えは2年後に出て来るであろうし、今回のWMで91年への意欲がますますわいていることも確かである。とりあえず来年のユニバシアードで一つの答えを探してみたいと思う。

## 予選に参加して

稲葉 英雄

一昨年のフランスにおける世界選手権にチームオフィシャルとして参加、昨年はオーストリアのワールドカップとノルウェーのオーフェスティバレンに出場、そして今年もオーフェスティバレン出場により、大試合や北欧のテラインに対する恐怖感は全くなく、トレーニング中もほとんどリラックスしていい雰囲気でも進んでいた。

私の目標は、何よりもリレーを走りチームに貢献することであり、個人戦は言ってみれば緊張をほぐすためのレースであった。しかし、決して予選通過をあきらめていたわけではなく、もちろん通過する意気込みでいた。ただ、もし予選で少々悪い成績を出しても、日本での実績からリレーには出してもらえると確信していたのである。

ところが、予選3日前のミーティングで吉田がリレーのみの出場に決まり（これは予定通りだった）、リレーに出場するのは吉田・山岸・村越の3人に加えて、稲葉・竹内の予選の成績のいい方ということになった。ただし、私と竹内は予選のコースが違うこともあって、もし似たようなタイムを出した場合はコーチの協議で決めるということであった。私としては、予選が突然リレーのセレクションレースになってしまったような感があった。竹内に勝つ自信はあったが、もし竹内のコースが簡単で私のコースが難しく私のタイムの方が遅かった場合、竹内にも私にも後々わだかまりが残ってしまうと考えて、いままでリラックスしていたのがやや緊張してきてしまった。「リレーを走るために来ているのに、竹内にも負けたらリレーを走れなくなってしまう」この考えが、そう強くはなかったも

の、頭の片隅にやや残っていた。

予選のスタートでは、フランスの世界選手権のスタートを見たことや昨年のワールドカップを経験したこともあって、それほど緊張もせずがいい感じであった。しかし、やはり竹内のことは頭の片隅に残っていた。そして、1番ポストで約1分のミスをした後は竹内のことが大きく頭に浮かび上がり、2番にもミスを引きずってしまった。その後、3番の直前で3分後のブルガリアの選手に、4番の直後で6分後のハンガリーの選手に抜かれ、そして極めつけは5番の直後に9分後のソ連の選手にもすごいスピードで抜かれて、そのスピードに度肝を抜かれてしまったのである。ショックは大きかったものの、逆にこれによって竹内のことも忘れ、すべてが吹っ切れたようだった。その後はポスト周辺での20秒前後のミスはいくつかあったものの自分のオリエンテーリングができたように思う。つまり、1番2番でのミスは精神面での失敗であり、残りのポスト付近での細かいミスは技術面でのものである。

ところが、これらのミス（トータル8分ぐらい）を差し引いても、実は予選突破ラインにはほど遠い。その理由はどこにあるのであろう。それは体力の差なのである。村越さんと私では体力の差が歴然としているのに、その村越さんがほとんどベストのレースをしてやっと予選を突破できるのだから、私の予選突破の可能性は実は非常に薄かったのである。しかし、私は決してあきらめてしまっているわけではなく、綿密なトレーニング計画を立て、次回の世界選手権ではなんとか予選を突破できるだけの体力・技術・精神力を備えたいと考えている。

最後に、日本チームを応援して下さった皆さん、どうもありがとうございました。

## B — ファイナル（8月17日）

### B — ファイナルについて

橋 直隆

予選の翌日、予選と同じ地図を使って決勝進出者以外の選手を対象にB — ファイナルが行われた。使用テラインは、前半が予選で使わなかったところで後半は予選と同じである。日本選手は、男子が山岸、稲葉、竹内、女子は木植、有村、深田の6人が出場した。B — ファイナルはトーナメント戦でいえば3位決定戦のようなもので、予選で敗退し意欲を無くした格上の者と一つでも上を目指す格下の者が混在するため、下位が上位を食うチャンスが多くあると思っていた。そして、距離も登りも国内大会と変わらないのでその一人に日本選手がなってほしいと願っていた。可能性としては実績からみて山岸だが予選で膝を痛めており、一発のある木植、深田に期待していた。

この日は、同じテラインで一般参加者のためのパブリックレースが行われており、我々スタッフも全員このレースに参加させてもらった。したがって、観戦記になるほどの情報は持ち合わせていない。結果的には、格上を食うという私の期待に反して、上位半分に入ったのが有村だけであった。リレーメンバーに入りたいという有村の意欲がこの結果を生んだのであろう。B — ファイナルは今回初めての試みであったが、このシステムが続くなら、このレースに対する動機付けについて再考する必要があると感じている。

## B-ファイナル完走記

木植 早生

B-FINALとは、前日の予選の結果により決勝に出場できない(上位25名と全員予選落ちの場合は各国1名が決勝進出)選手達で、もう一つのレースを走り順位を決める。日本チームからは、決勝に出場の村越君と新沢さん以外の男女3名ずつ。全員予選落ちの国が男子で8チーム、女子6チームもある。リレーを組めない国もあるが、これでいい勝負ができるのではないかと楽しみである。

ゲレンデは、バスで45分位の昨日の予選とおなじMAP。同時にパブリックレースも開催されているので、多くのオリエンティアと出会うことであろう。但し、前半の約30%部分は、昨日入らなかった所であり、パブリックレースのコースからも除外されていてB-FINAL専用になっている。また、ポストはすべてB-FINAL専用である。

B-FINALなのだろう。なんとなく全てに、張りつめた空気とか緊張の表情とか、あまり見受けられない気がする。会場に着くと、すでにパブリック参加者がどんどんスタートに向かって行く。私たちのスタート会場は、その誘導路のすぐそばである。昨日の帰りに会場設営らしき作業を見て通ったので、ははーん、とは思った。

小雨降る中、寒くはないが、随分早く来すぎた。およそ30分間隔で、日本選手がスタートする。それを見送りながらもとても退屈してしまった。次から次へとパブリックのスタートへ向かう人を見送っては、誰かしら知っている人はいないかしら、会わないかなあ……。カメラを持って知らない人と「ハイ、グッドラック」と言ってみてはまたテントに戻る。1人ひとり森の中に消えてゆき、あと何人と数えられるくらいになってから準備体操。私は女子選手の中で、あとから3番目のスタートだ。もやもやした気持ちで泣きたくなかったのは、スタートドロウの1~4枠のうち女子3人が打ち合わせて3枠を希望した私は、タペのドロウイングで4枠に入っていた(橋氏のエントリーミス・編集者註)のにショックを受けたのが未だに響いているからだ。……。そうだよ、どーせ私は英語はしゃべれないしさ、オリエンテーリングも遅しさ……。なんて。チームの人のスタートを見送れたしゴールでは皆が迎えてくれるからまあいいかあ。

いよいよスタート間近になって急にトイレに行きたくなる。もうコールが始まっていた。ふーっ、一汗かいた。後ろの二人には2番ポストあたりで抜かれちゃうかな。昨日は90度方向をずらすし、後半は体力尽きてのろのろ、挙げ句にここ何処だ、で立ち止まって時間ばかりが過ぎてゆくし。焦らずトレーニングキャンプの時の様に気楽にやればいいんだよね。

△→1 八ヶ岳or富士宮ふう。一気に直進。面白い位にピタリ。信じられない。線上に確かに現われてくる。当たり前なのに感激だ。後の成績表でわかったことだが2位で通過していたのだ。お見事、かな。

1→2 途中でルートを変えたもののなんとか緩い登りも走る。順調まずまず。

2→3 つまらないところでうろつく。これがきっかけで、そっちへよろよろ、あっちへふらふら。細かい丘・凹凸地・湿地は比較的少なく走り易い、そう難しくはなかった。のに、なあー。あーあっ。

3→4 藪と知りつつもがきあえいで、立入禁止を大きく迂回し、ロス。円の中に入ってからはいいのだが、その前の大きく地形を読むのが下手なのだ。

後半はもう人だらけ。ゼッケン付けて、てれんこしてるの恥ずかしい。ラストの部分ではまあなんと賑わっていることや、ごやごや。ここの湿地でズボリと埋まった。会場からのスピーカーが鳴り響く。歓声も聞こえ出した。ラストポストからは昨日の誘導テープのまま、距離はその半分。レーンにはどんどん人が流れ込む。両サイドは走り終えて応援する人がいっぱい、つい頑張らなくてはならない。聞こえる、ガンバレーの声が。見え

る、手を振る姿が。ありがたくって、うれしくなって。

B-FINALとて上位に食い込むことはかなり大変かと思う。言い訳になるけれど、初めてゲレンデに入ったときは、慣れなくて焦ってどうしようかと思っただけだったのに、コーチやメンバーのおかげで、直前のモデルレースまでにはかなり調子があがって、皆、顔に赤味が差してきたんだけど……。肝心なところで発揮できないのは、鎖国のせいかしら?! 3人共、あのミスあのロスと考えると結構短縮してもうちょっとタイムが良くなったかな、と思うけど、それは上位の人とて同じ事でやっぱりこの範囲なんだよね。

B-FINALは、おまけかなーと思う所もあったけど、ちゃんと表彰式はあったし、レース自体だって上位の方はかなり微妙なタイム差だ。私たちはトップに20分の差がついてしまったけれどそんなにひどく崩れたわけではなかったし、成績表を見てもわかるように周りに随分友達ができたなあと思う今回の大会だった。女子は合計30人のエントリー。4年前にオーストラリアのWOCに参加した時は、リザルトボードの下の方にJPN、HKG、IRL、USA、FRA、NZL(ちょっと範囲を広げてみたけれど、本当はJPNの下はすきま風……。) 今やNZLは手の届かないずっと上ですごい飛躍をみせているし(そう、特にジュニーニ)、IRL・POL・AUT・YUG・BEL・ITA・USA・FRAとまとまると強い国々が肩を並べているのかしらと次回が楽しみであり、頑張れるよと、ほんのちょっぴり期待して……。B-FINALは今回、試みとしてあったのだが、次回からもあるのだったらありがたい。そして、日本女子も決勝には二人位、Bでも一桁に入れそうな力はあると思うのだが……。

私は自分の事で考えると、いかに速く走れるか、というのははっきり言って無理だ。でも、地味だけれど走っていられる体力は付けられるかも知れない。そうすれば、ゆっくりでも確実なOLを当てはめて行けば、ゴール後はさわやかだろう。

## B-ファイナルに参加して

山岸 倫也

1989年の2月のある晩、僕は世界選手権で銀メダルを取る夢を見た。「WMでメダルを取る夢」なんてすごいと我ながら思ったが、それが金メダルではなく銀メダルである点が自分らしいなあと感心した。これはきっと、いつも村越の下で走っているせいなのだろう。そして、その夢はIOFのブリテンで今回の世界選手権からB-ファイナルが行われるという記事を読んだすぐ後のことであった。

B-ファイナルでも銀メダルを取ることは並み大抵のことではない。実質的には決勝(A-ファイナル)へ進出した50数人+2位なのだからである。今回決勝に進出した村越でさえ、あの長くてタフなコースの前には48位だったのだし、僕の最高順位も46位なのである。そして、B-ファイナルに参加する選手にはよけいなプレッシャーはないだろうから、その分タイムは速くなってまとまるにちがいない。40人のB-ファイナル参加選手のなかで10位だったらすごいものだし、僕は、とりあえず20位を目標にして走ることにした。

2日前から古傷の膝が痛み出し、セラピストへ治療に通いながら、3日後のリレーが膝のせいで走れなくなったらどうしようなんて考えながらの出場であった。さいわい膝はこわれるまでにはいならず、でもスピードの乗らないレース展開では12km弱のコースを103分で走るのが精いっぱいだったのかもしれない。順位は22位であった。

世界選手権で本当の自分の得たい結果を出したかったら、何にもましてスピードをつけることが大切である。走るスピード、判断のスピード、思考のスピード、様々な動作のス



ビード、それらなしに良い結果が得られるはずもない。これから世界選手権を目指そうとする諸君がいたら、そのことを良くわかってからチャレンジして欲しい。

## 個人決勝（8月18日）

### 個人決勝レース観戦記

出田 祐子

8月18日、少し寒いが気持ちのいい朝だ。選手の村越真・新沢祐子に乗せたバスを見送った後、ゴール会場へ向かうバスに乗る。

10:45 頃会場に着くと、まだスタート時刻にも間があるというのに、思い思いの場所をキープする観客で、会場はあらかた埋まっている。

11:01 短く音楽が鳴ってトップスタートを告げたのに続き、会場には実況のアナウンスがスタートの様様・ラジオコントロールからの情報などを刻一刻と伝え始める。

12:03 トップスタートのフィンランドの女子がゴール。そして続々とゴールが始まる。

12:29 スタートの早かったスウェーデンのアリヤ・ハヌス（前回女子優勝）がゴール。70分。その時点でトップに立つ。

12:42 男子のトップゴール。101分台。

13:07 ノルウェーの女子アンデルセンが69分台でゴール。この時点でアリヤ・ハヌスの2連勝はなくなる。

13:27 ソ連の女子アリダ・アボラがゴール。速い。68分台だ。

13:44 スウェーデンの男子ホーカン・エリクソンがゴール。100分台でトップに立つ。

13:46 エリクソンの3分後にスタートしたノルウェーのホバード・ツベイトがものすごいスピードでゴール。エリクソンにわずか6秒の差をつけトップに立つ。ツベイトは、ラジオコントロールからの情報ではエリクソンに常に2分くらい負けていた。最終ラジコン後の大逆転に、場内は沸いた。

14:05 村越が、スウェーデンのベテラン女子カリン・ラーベとほぼ同時にゴール。127分だ。 続いて、

14:07 新沢ゴール。力強い足取り。114分。

14:16 ノルウェーの男子ピーター・トーレセンがゴール。速い。96分台。ダントツでトップに立つ。

14:20 スウェーデンの女子マリタ・スコグムがゴール。64分台。これもダントツだ。だが、9分後にスタートしたチェコのヤナ・ガリコバが追っている。

14:29 ヤナは現れない。これでスコグムの優勝がほぼ決まったな、と思ったところにヤナが現れた。14:30 ゴール。1分半ほどの差でヤナの2位が確定した。

途中、天候は荒れ模様になっており、時折にわか雨がザッと降り、風も冷たくなった。観客は傘をさして観戦を続ける。

続々とゴールが続くが、あとはスタートの遅いケント・オルソン（前回男子優勝）がどういうレースをするかに興味の的は絞られる。ラジコンからの情報では、どうも苦戦しているようだ。

15:19 ケントの姿は見え、トーレセンの優勝が決まった。

15:22 ケント・オルソン、ゴール。99分台で、なんとか2位にくいこんだ。 結局、男子はノルウェー・スウェーデン・ノルウェーの順で、6位までを北欧3国が占め、北欧勢の強さを見せつけた。逆に女子は、1位はスウェーデンであったが、2位チェコ、3位

ソ連と、東欧勢の躍進が見られた。

スウェーデンで開催された今回なので、スウェーデンは前回に引続きアベック優勝を狙っていたと思われるが、残念ながら男子は“男子のノルウェー”にタイトルを奪われる結果に終わった。

また日本は、村越48位・新沢55位に終わり、前回の順位を上回ることはできなかったようだ。

## 個人決勝

新沢 祐子

4年前のWM85を経験して以来、私はWMの個人決勝を完走することを夢みてきた。この夢は、2年前フランスの個人決勝を走った高野（長田）さんの感想を聴くにつれ、ますます強いものになっていった。彼女の感じた「ただこの素晴らしい機会に満足のいくレースがしたい、それだけを願う。天気がいいことを喜ぶのと同じように、このレースを走ることが嬉しかった」この思いを抱いて世界選手権という最高のレースを走ることが、夢みてきた。

個人予選結果、深田（Aコース）82分26秒＝39位、新沢（Bコース）86分37秒＝34位、「全員予選落ちした国は、もっとも順位の良い選手が決勝進出」というルールにより、キツネにつままれたような気分と妙なひっかかりを私の中に残して、私の決勝進出が決まった。

そして、8月18日、妙なひっかかりと、9.8kmという長距離のコースに対する不安を少し抱いてはいたけれど、穏やかな気持ちでレースを迎えることができた。予選の時のようなからだの硬さは見られずリラックスし、それでいて適度な緊張感を保つことができた。誰々に勝たなくてはいけない、何分で走らなくてはいけない、そんな義務感は忘れて、ただこのレースを走ることがうれしかった。そう、夢はある意味で実現したのだ。

けれども、こうした幸福感だけでは満足なレースができるわけではないんだ、とこの決勝レースは私に思い知らせてくれた。精神的にいかによい状態でレースに望むことができたとしても、実力がなければ元も子もないということだ。その実力というのも、もっとも基本である体力、9.8kmを走り切るだけの体力なのである。決勝レースは、前半にくらべて残り2kmから急にアップダウンが増え、ヤブも増えてくる。この残り2kmをまともに走り切ることができなかった。集中力の欠如による大きなミス、またミスをしないうレグでさえタイムが非常に悪い。「オリエンテーリングはスポーツなんだよ。スポーツの世界選手権に参加しようと思う者が、こんな9.8kmほどの距離でバテているのかい？ コースを走り切ることさえできない者が、競い合おうなんて間違いだね」という考えが、ラストコントロールにむかうヤブの斜面を這うように登る私の頭の中を、ぐるぐると巡っていた。

2年前、フランスの予選を走って「普段の力」を出すことさえできればなんとかなる、と信じていた。確かに、どんなレグでもなんとかこなす自信はつけていた。技術的には「普段の力」は、最低条件をクリアしていたと思う。しかし、私の現在の体力は決勝に通用しなかった。のびのびと走れただけに、この事が浮き彫りにされた。

とても悲観的なことを書いてしまったけれど、でも、決勝は素晴らしい舞台だった。この最高のレースに参加できたことを心からうれしく思う。そして、悲惨な姿だったにもかかわらず、ゴールレーンを駆け抜ける幸せは4年間夢見るに十分なものであった。

予選があった日の午後、疲れをほぐすためにサウナに行った。泡風呂に入ってみると、一度はお話ししてみたいと思っていた西ドイツのハイドルン・フィンケがいるではないか。彼女は85年のオーストラリアのWMでは、5大国を除いてトップの12位という成績を修めている。今回も17位で予選を通過、また西ドイツは、女子全員が予選を通過するという快挙を成し遂げている。中堅国にとっては予選を通過することは大きな目標なのだ。

私は、予選の仕組みもよくわからずに走ったハンガリーでは通過したものの、前回は納得のゆかないレース展開のため予選通過を果たすことができなかった。いわば「お情け」で決勝を走らせてもらったのだ。だから今回予選を通過することを目標におき、そのためのトレーニングをしてきた。それが果たせたことは素直に嬉しい。同時に決勝を走ること誇りを感じていた。他のトップの国々のランナーたちと同じ資格で決勝に参加したのだ。

定員3人の泡風呂の中に様々な国の9人のランナーが入り、一瞬会話が輪のように広がり和やかな雰囲気生まれた時にも、自分がその中で積極的な役割を演じ、同じ舞台に立っているのを感じた。地理的にも言語の面でもハンディーキャップのある私たちが、他のヨーロッパ諸国のランナーと同じ舞台に立ち、競い合う事が如何に重要でまた難しいことか？時として私たちは彼らの添え物であるかのような意識をもってしまうものだ。どこかで主人公にならないでいようとする意識のあるものは、シビアなレースの場面で自分の力を発揮することなどできないものだ。だからサウナで感じたことは、この1年間そうであろうと努めてきた結果なのだ。サウナを出た時には、30位に入れるんだという確信のようなものが生まれていた。むしろそれは確信などという強いものではなかった。世の中には疑う余地のない信頼関係というものがある。それを確信という言葉では形容しないだろう。なぜなら疑いがないのだから、それを信じているということすら意識しないのだ。そんな自然な認識だった。そこには「30位に入れなかったらどうしよう」という不安の入り込む隙間はなかった。30位という順位よりもそのほうがもっと大切なことだった。

今回のスケジュールでは、予選と決勝の間にB-ファイナル、いわゆるコンソレーションがあり、決勝に参加する人間にとっては中1日の休養がある。私たちのように予選でかなりの力を出しきらなければならないランナーにとって、その一日は貴重だ。ゆっくり睡眠をとり、軽く体を動かして回復をはかる。とにかくベストの状態であれば、結果はそれについてくるだろう。

こうしてレース当日がやってきた。前日の寝つきは少し悪かったが目覚めは信じられないほど爽快だった。パッと目が覚めた次の瞬間アラームが起床時刻の7時を告げた。地図とテラインの対応も完璧にできる。ルートプランも適切だ。なによりその通りに実際に走ることができる。技術的にここまで完成しているという柔らかな安心感が頭の中にはなく、体全体にあった。問題なのは、このタフなコースを走りきることができるかという点だ。それだってこれだけ十分疲労から回復しているのだから何とかなるだろう。優れた組織が仕事をこなすときのように、体の各部が意識を超えてそれぞれの役割を果たしていた。頭はしっかり醒め、内臓はエネルギーを蓄えるために働き、脚は疲労から回復しようと努めていた。「速く走ろう」とか「がんばろう」と考えることは不要などころか、かえってそうした統一のとれた状態を邪魔してしまうだろう。今は完全に自分の体を信じて任せるときだ。

走りだしてから好調だ。2番でベルギーのランナーに追い付く。「今日はいろんなランナーに会うぞ」と思っていたが、その通りになった。難しい2番、危うい3番もミスなくこなす。20%の距離の所にある給水コントロールで26分か、2時間レースかな？でも前半の細かい部分を抜ければスピードを稼げるから、1時間55分くらいで走れるかも

しれない。ロングレグは大きな道周りをする。スピードが今一つだが後半のレグを全部読み切った。あとはそれを着実にこなしてゆくだけだ。そして8番、ノルウェーのホバート・ツベイトがあらわれる。9分後のスタートだから少し早過ぎる。ロングレグのせいだろう。おとといの予選では1分後のスタートで、コースは違うものの、6番で姿をみつけて驚いたが、さすがに決勝ではスピードが違う。爆発的に速いわけではないが、登りになると確実に差を広げられる。

中盤以降は難しいレグは一つもない。ラフに走れる部分が多いからスピードの切り替えに気を遣う必要がある。ガンガン走ったあとの細かいアタックでは、スピードを落とすことができずにミスをしがち。これまでのWMのレースで常に失敗してきたパターンだ。きちんとした手続きで、これらの部分もロスなく乗り切っている。大胆な迂回ルートも気持ちよく走れた。うん、2時間は確実に切れるだろう。突然の雨にも「観客の人は大変だなあ」と思う余裕すらあった。

17.7キロというかつてない距離と、様々な要求を持った変化に富んだコースがそのまま乗り切れるわけはなかった。その兆しは19番ポストでのミスに現れている。Bのグリーンの中とはいえ、大きな凹地の縁の沢、間違える余地のないポストだ。直進がそれる。途中の岩を見て修正する。手前の凹地から尾根にあがる。そう、そのまますすぐだ。40歩、100m、凹地に入っていき気配がない。ここで止まってはいけない。これまでもしばしば手前でうろつくことがあった。それほどショックではないのだが、凹地をみつけることができない。一体どこにいるんだ。周りにはなにもロケットするものがない。「戻ろう！」不思議なほど決断は速かった。200m弱だから、すぐに戻れば3分以内のロスですむ。さっき確認できた場所はわかっているのだから。やはり直進がずれていたのだった。もう簡単だ・・・。

このロスのショックは大きかった。いよいよ登り下りの多い、タフな場所にさしかかる。プランナーのことば通りに、最後の1/7に全体の1/4の登りが待っている。おまけに伐採地で藪は汚いときている。最後まで積極的にレースを進めようとするランナーだけが、この区間を満足できるタイムで乗り切ることができるのだ。2番ポストで見たベルギー人が前方の伐採地を登っているのがみえる。こちらのペースが思ったほどあがっていないのだ。その前をゆくのはスイスのウルス・フリーマンではないか。前回のWMで3位になった彼が、伐採地の斜面を重そうに進んでゆく。コースはそれほどタフなのだ。OLが単なるクロスカントリーとは違うことは誰もが理解している。それと同時に、単なる地図を使った謎解きでもなく、最高の生理的負荷の中で明確な情報処理をし、また強い精神力で体を移動させる、メンタルにもフィジカルにもタフな競技である。スウェーデンがWMに用意したこのコースは、それを端的に表明している。開催国スウェーデンの選手が、そこで完全に成功しなかったのは皮肉なことだが、中堅国の選手の多くも、彼ら自身のOL観と実際のコースが与えた課題のズレによって満足できる成績を修めることができなかった。

かく言う私にとって今回の決勝の結果はどんな意味をもっているのだろうか？ 予感していたような結果は修めることができなかった。しかし本当に予感していたのは、結果そのものではなく、どんな走り方ができるかという点ではなかったのか？ 確実なレースをするためにペース自体はゆっくりしたものであった。しかし今回目標としていた、細かいテクニックをきっちり使ってミスのないOLをするという目標は達成されたように思う。そして朝の予感がそうであったように、ただ一つの弱点であった距離を乗り切る持久力～精神的・肉体的～だけが結局はどうにもならなかったのだ。そして今回のコースはそこにこそ最大の比重を置いたものだった。

今回のレースから私はなにができて、なにができないかを明確に知ることができた。そし

て他の誰かが再び挑戦する時、なにをすれば良いかも明確に告げることができるだろう。今回の予選と決勝のレースが、私にとっても、また日本のエリートにとっても確実なステップとなることを期待しよう。

## リレー — (8月20日)

### リレー観戦記

深田 幸子

最終日はいよいよリレーの日です。リレー会場は牧草地で、一番低い凹地を走者が走り、観客側は斜面になっており遠くの走者がよく見えます。ゴール付近には大きな速報板があり各国のゴール順位が示されます。また、大きな電光表示板に中間速報や順位などが次々と表示されます。中間速報の掲示板もありましたが、掲示が遅いのであまり見る人はいなかったようです。中間タイムなどのアナウンスが、スウェーデン語と英語でスタートからゴールまで続けられたので、トップ争いの様子がよくわかります。これだけあると途中で飽きてしまうこともなく、とても観客を意識した会場・運営でした。ただ、アナウンスは上位の国に偏っているの、下位の国の者としては少し不満でした。スウェーデンでやっているのではかたがないかな。

7:00 会場に到着。役員がまばらにいただけだが、みるみるうちに観客が増える。

8:00 音楽とともに一斉に26カ国の旗が上がる。なかなか壮観。一走の人々はスタートの準備をしている。全体に緊張した雰囲気がある。二走以降の人々か、ウォークマンを聞いている人がかなりいる。精神統一、落ち着くのに良いのだろうか。

9:00 男子のスタート。ケント・オルソンがトップで走り出す。地元だけあって声援がすごい。村越さんは後ろの方。落ち着いてスタートしたように見えた。

9:30 女子のスタート。新沢さんのスタート棒はスウェーデンとノルウェーにはさまれてちょっとかわいそう。女子も男子に負けず、すごいスピードで走って行く。ついていくだけでも大変そう。

10:00～ 男子の一走が次々とゴール。スウェーデンが約3分も遅れ、これが最後までひびいてしまう。村越さんは13位という素晴らしい成績。アナウンスでもしきりに誉めていました。

10:20～ 女子の一走のゴール。男子より間隔をおいてはいつてくる。新沢さんは19位。とても疲れているみたいだが、まあまあレースだったらしい。

11:00～ 男子の二走がゴール。ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの順。4位が少しあいてしまったので、この3国の争いとなる。

11:20～ 女子の二走のゴール。スウェーデン、チェコ、フィンランド。観客はスウェーデンが1位になって大喜び。ノルウェーが遅れてしまった。

12:00～ 男子の三走ゴール。スウェーデンが1位のノルウェーに1分差まで追い上げた。

12:20～ 女子の三走ゴール。スウェーデンと2位3位の間が3分も開いてしまう。女子はどれもスウェーデン独走のようす。

13:00 2位に3分の差をつけてノルウェー四走のゴールイン。三走までの3人も国旗を持って一緒にゴールレーンをウィニングラン。とっても嬉しそう。スウェーデンの四走が帰ってきて、観客は2位で残念なのか静かだった。

13:10 女子の中間速報では、チェコが徐々に1位スウェーデンとの差を縮めているらしい。どちらが先にゴールレーンに入ってくるのかドキドキしていたら、スウェーデンが先に入

ってきた。50mくらい後にはチェコが続いている。結局スウェーデンが逃げきって優勝、15秒差でチェコが2位。

13:40 女子三走の制限時間のため、三走がまだ帰らない日本は四走ヘタッチできなくなってしまった。四走はゼッケンをはずし、計時なしのスタート。完走させてもらえないというのは悲しい。5時間の制限をオーバーして20カ国中5カ国も失格になってしまった。せめて男子の制限6時間の15:00までならば、何か国か失格にならずにすんだのに。一人につき75分というのは厳しすぎる。

14:40 表彰式が始まる。まずは女子。1位はとても嬉しそう。やはり、うらやましくなる。その最中に日本の四走がゴールイン。式の最中でちょっとかわいそう。次に男子の表彰。ノルウェーの嬉しそうな顔とスウェーデンのふてくされた顔が対照的でとても印象的でした。

### フジオくんのリレー観戦記

竹内 藤雄

V M-Weekの最後を飾るリレーは8月20日に行われた。男子は村越-山岸-稲葉-吉田、女子は新沢-出田-有村-木植のメンバーで挑むことになった。一走の村越さんの様子は例のごとくであり、ファインダーで見る姿からはまったく不安を感じることはなく「これはいいところで帰ってくるな」と直感的に思った。それに対して新沢さんの方からは、なぜかいつものパワーを感じることができず、もしかしたらの不安がよぎった。

一走の地図は選手に裏を向けてぶら下げているので、走路わきで観戦する我々にはまる見えであった。地図は予想外に小さく、かつ黄色(オープン)が目立っていた。スタート時刻がせまり緊張感があたりにはたどよう。号砲一発! 各国の選手が我先にとびだし、どこがトップなのかわからない。村越さんは・・集団の後ろの方にしっかりつけている。自分のペースを乱してもいいし、集団のペースにもしっかりと乗っているようだ。去年のユニバシアードのリレーで、見栄をはって真っ先に飛び出して見事にはまった自分のことをふと思いだし、苦笑してしまう。もう同じミスはしないだろうが・・・。

30分後、女子もスタートした。女子も男子同様ダンゴ状態、新沢さんは・・集団から少しおくれて一人走っている。作戦のうちなのだろうが、ここまで自分自身のペースに固執する必要はなかっただろう。もっともスタート直後だけの姿だから、その後の展開がどうだったのかは知るすべもない。しかし、90分という結果から考えれば、ミスをするしないよりもペースに乗れなかったという方が大きかったと思う。

やがて、わずか2名の男子のトップグループが戻ってきた。前回のフランスではダンゴになってきたことを思えば以外であったが、中間計時でグループが分裂していることは伝えられていたので、それほど衝撃はなかった。村越さんの話によると、ケント・オルソンの率いるバックがまとまって飛んだことが原因らしい。結果的には、ここで作った差をノルウェーが最後まで守りきったかたちになったわけだ。トップが帰ってきて7分少々たったころ村越さんが帰ってきた。順位こそ13位であるが、この差なら十二分に満足いくレースだったことだろう。

女子トップのノルウェーに2分おくれて地元スウェーデンのカリン・ラーベが帰ってくると、会場は割れんばかりの歓声につつまれる。たいした熱狂ぶりである。うらやましいとさえ思える盛り上がり方で、自然と自分自身のアドレナリンの量が増えているようだ。各国のタッチが続いた後、日本のライバルとされるアメリカやオーストリアも帰ってくるが、我がチームの一走は帰ってこない・・ようやく新沢さんの姿が見える。前のチームとはかなり水をあけられている。私の目には作戦ミスとしか写らないタイムであったし、

どう見ても力の出し切れた走りとは思えなかった。

女子のレースに関しては少々レースの流れをはずれるので、ここでまとめて書いておこう。二走の出田さんもまた90分後に帰ってくるのだが、ゴールレーンに入ってから走り日本選手中もっともカッコよく、まったく別人の走りに見えた。真に風のごとくレーンを駆けぬけて行った。三走の有村さんもやはりペースに乗れず、これまた90分という不本意な結果となってしまった。ちなみに、二走のゴール時点ですでに周回遅れになっており、三走のゴール時点で優勝は決まっていた。その時点でもう失格になっており、四走の木植さんはゼッケンなしの姿で走るはめになったらしい。その姿を見て一番くやしそうにしていたのが、私同様メンバーから外れた深田であった。「自分が走っていれば・・・」とでも思っていたことだろう。会場の後片付けが始まった頃、木植さんが予定(予想)時刻に帰ってきた。長距離バスの出発時刻の関係で着替える時間がなく、ひたすらダダをこねる木植さんの姿がとても可愛く見えたし、それを論理的に説得している深田の姿がとても面白かった。

さて、話をもとに戻そう。二走のゴール時点での男子トップはノルウェーであり、スウェーデンとの差は約1分に縮まっていたものの、三走は個人優勝のトーレセンで不安材料はないようである。対するスウェーデンはおなじみのヨルゲン・モルテンソンで、なかなかおもしろい争いである。女子の二走はなんとノルウェーが大爆発し、トップで帰ってきたのはスウェーデンのエリア・ハヌスであったりする。我が男子チームの二走は百戦錬磨の強者の倫也さんなのだが、今回は前回に比べるとかなり精彩を欠いていたような感じが予選のころからあったし、おまけに予選で膝を痛めていたため、これらの影響がタイムに確実に出ているような結果だったと思う。倫也さんから19位で受け継いだ稲葉さんは無難にレースをこなし、順位を変えないことなしに四走吉田さんにつなぐことになるが、何事もなかったように走りきるところがいかに稲葉さんらしいシブさを感じた。

三走の終了時点で、男子ノルウェー・女子スウェーデンが2位に2分前後の差でトップ。ノルウェー男子はその差を守ってゴールイン。男子は分差で盛り上がらなかったが、女子の方はチェコのヤナ・ガリコバの猛追撃があり、トップとの差が徐々に縮まって、第2中間ではとうとう1分を切ってしまう。しかし、個人優勝のスウェーデンの四走マリタ・スコグムは見事に逃げきってみせた。最終コントロールでの差は30秒を割っていたのに、しっかりとウィニングランをすところがすごい。会場は沸きに沸く。すぐあとから大きなチェコの旗をはためかせてながらヤナが走ってくる。まるでWM91の宣伝をしているようにも見えた。たしかに91年はみものであろう。

我々の四走吉田さんのスタート時点で、前との差が13分、後とは6分程度、ところが前のニュージーランドの四走が大爆発して差が7分程度にまでなり、もしかしたらと思ったものの、やはり逆転は無理だったようで順位は変わらずにゴールへ。ゴールレーンの入口で日の丸を受けとり(なんと地元の連中がすべての国の旗を用意してあったらしい)、レーンを走り切って19位でフィニッシュ。フランスのペナで実質的には20位。目標のニュージーランドまであと一息だったことを考えれば、それなりに満足できる結果と言えよう。

VM89は終わり、また91年への戦いがはじまった。2年後は自分もこのレーンを駆け抜きたい、今はそう思うだけである。

## リレーを走って

出田 祐子

8月9日のミーティングで私はリレーだけを走ることにになり、それ以来ずっと20日のリレーのために調整してきた。リレーだけの選手は、精神的に（出番を待ち続けるということ）非常につらい思いをすると聞いていたが、今回はパブリックレースがあったことなどにより（そしてD21AKで優勝するというおまけもあった）、特につらい思いもしなくてすんだ。そして、技術的・体力的にも精神的にも充実した状態で、20日を迎えた（つもりだった）。

「予定通り、予定通り。ユーゴとの差をつめている」私が2走を走り終えてアリ（有村）にタッチしたとき、橋先生・倫也くん・藤井くん、みんなそう言って出迎えてくれた。そうか、一応役目は果たせたんだな、とほっとした。1走のユー（新沢）87分、私91分。ユーが19位で帰ってきたのを、私は20位（最下位）に落としてしまった。そう、途中でオーストリアに抜かれたのは知っている（めっちゃめっちゃ早くゴールしたらしい）。でも、先行するユーゴも見たんだ。後はきっとアリとさなえちゃん（木植）がなんとかしてくれるだろう・・・。

最下位脱出を目標とする日本女子チームは今後の展開に期待して、ラジコンの発表に注目していた。とてもいいムードだった。あの瞬間までは。

突然の失格宣言だった。にわかには信じられず、茫然とするほかなかった。結局、下位5ヶ国ぐらいが制限時間オーバーということで失格になってしまった。女子の競技制限時間は5時間（4時間10分で4走にタッチできない）ということだったらしいが、前回やそれ以前は5時間を越えても順位がついていたことを考えると、今回の主催国スウェーデンが独自に作ったルールと思われる。日本にとっては、非常に厳しくむごいルールだった。

とはいえ、自分の力が足りなかったのも事実だ。私は、爆発しなかったことについては評価しているのだが、もっとはやく走れたはずだという不満を残している。やはり、世界選手権というのは、初参加で満足のいく結果を出せるほど甘いものではなかったのだろうか。あの最高の舞台上「自分のOL」をすることの難しさ。今回実際に走ってみて初めてわかった雰囲気、次の選手に（私自身を含めて？）できる限り伝えるべきであろう。

## 男子リレーについて

吉田 勉

1週間にわたって行われた世界選手権を締めくくるリレーは8月20日、男子は午前9時、女子は9時半にスタートを切りました。会場には多くの応援団、見物人がきて、今回一番の人出です。今年うれしいことに日本からも30人ほどが来てくれています。そして私にとっては、2年待った、今回初めて最後のWMのレースということになります。

電光掲示板に1走の中間タイムが次々と表示され、スウェーデン語、英語、ドイツ語でアナウンスされます。3.5km地点、5km地点、村越は第2グループでケント・オルソンとともに走っています。

60分を過ぎた辺りでフィンランドとノルウェーが続いてゴールしてきました。ノルウェーのオイビン・トンはこれを走る為だけにここにきて、見事その役目を果たしました。とても素晴らしいことです。4分遅れて個人銀メダリスト、スウェーデンのケント・オルソンのゴールです。一段と大きな歓声が湧きます。

我が村越は、7分遅れてのゴールです。“13th, JAPAN, GOOD RUN!”英語でのアナウンスです。2走の倫也は、今ひとつの調子ですが、何とかやってくれるでしょう。第1中



間での順位まではわかりましたが、後は、トップグループと女子のレポートで、位置を把握することができません。予定タイムで準備するのみです。

倫也のゴール、ほぼ予定どりの時刻で稲葉へのタッチです。順位的にも、もう落ちたくはありません。

ここで、私はやっと準備を始めることとしました。不思議なくらい落ち着いています。体は軽く、どこにも痛みは感じません。テーピングをして、ストレッチをして、15分ほどのアップをしました。テントへ帰って休み、出番を待ちます。予定通り、いや、予定より早く、稲葉のコールがはいりました。これから10分程でスタートです。前のニュージーランドとの差は12分、これは追いかけてはいけない。待っている間に日本の次のベルギーのコール、約7分差、終盤で合う可能性は充分にあります。そして稲葉のゴール、彼もやっと吹っ切れたようです。

スタート直後、大きなミスをしました。どうすればいいかわかっているのですが、体が動きません。動いても前に進まないような気がします。ここで3~4分のミスです。やっぱり世界選手権だなあと、半分パニックになりかけの頭で考えていました。事前に自分がなにをすべきか、どうやればいいのか考えたことを、はんすうしながら走りました。

中盤に入り、どうやら言い訳の気持ちに、攻めの気持ちが勝ってきたようです。中盤の数レグは、所々でミスをしたものの快適なOLでした。自分が前向きにOLをしているという気持ちが、少々のミスに対するためらいやストレスを抑えていたのです。もちろんいつも後ろには気を使っていました。なにせ、1番の時点で後ろとの差は3分程度になっていたのですから。

終盤を迎えて、今度は慎重なOLに切り替えました。ここでのミスはもう許されないということと、ゴール勝負になった時の準備の為に。(他国との走力差はこちらに来てからもずっと感じていた事でしたが、“ゴール勝負では絶対に負けまい”ということだけはずっと思っていました。なぜなら、それが私たちにとって一番簡単な言い訳だったからです。)何度か立ち止まり、道を確認し、そして最終ポストへ。後ろに人の気配はなし。目の前にゴールレーンが広がりました。他のランナーは見あたりません。前回あんなに遠かったゴールがぐんぐん近づいてきます。そして、ゴール。“抜かれた?”というのが最初の言葉。“大丈夫!”安心してふと左手を見たら女子の表彰式の真っ最中でした。

結果は、25カ国中、フランスが失格で19位。僕らは当初の目的を果たし、僕は自分の責任を果たし、満足………?

確かに、ゴール当初は格好がついたという安心感でそんな気持ちもありましたが、数字は厳しいもので我々の84分、85分、87分というタイムはやはりどうしようもないタイムで、「真ちゃんと3人のお供(これは僕が気に入って使っているのですが)」という表現がぴったりです。それが、できない事なら仕方がないにしろ、僕は今の実力でもあと10分はタイムを縮める事ができます。後の二人も80分を切ることは難しくないでしょう。そうすれば、アメリカまで手が届きます。ニュージーランドなどはあと6分で良かったのに!(もちろん4走のケビンが遅すぎたのですが)これは非常に悔しいことです。満足などはできるはずありません。

次回のお友達は、ベルギーや、ユーゴや、アイルランドではなく、アメリカや、ニュージーランドだと、そう思ってあと2年間過ごしたいものです。

## 総括

スタッフとして世界選手権に参加して

藤井 範久

僕が役員として選ばれたことをご存じでない方もおられるかも知れませんが、役員として世界選手権に参加できたことをこの報告書を読んでいる皆様へ感謝致します。役員としての仕事内容は、トレーニングキャンプでのトレーニングコースのセットや地図の丸書きが主なもので、僕以外の人でもよかったのかも知れませんが、僕にとっては非常に貴重な経験であったと思います。これからこの経験を自分のOL人生に生かすと共に、日本のOL界の発展に役立てて行きたいと思います。

さて世界選手権が終った現在、一番残念なことは女子チームのリレー失格である。制限時間が5時間であることを考えると（今回の競技ルールに明記されていたが）、一人の持ち時間は75分となり、この時間は個人戦の予選通過時間と似たようなものである。予選の結果から判断すると非常に厳しい制限時間であったが、トレーニングキャンプと深田や出田が参加したパブリックレースの結果を見ると決して無理なタイムではなかったと思う。では何が問題であったのだろうか。深田や出田の言葉を借りると世界選手権という大会のプレッシャーに負けたのであろう。自分自身の力を100%出すことができれば予選通過もリレーの完走も比較的簡単にできたのではなかろうか。2年後の世界選手権に対する課題の一つが明らかになったと思う。それともう一つ、これは僕一人が感じている事かも知れないが、疲れを残さないように考えトレーニング量を落とすすぎたのではなかろうか。トレーニングキャンプに入ってから、女子選手の1日のトレーニング量は8キロ程度であったと思われるが1回5キロ以上のオリエンテーリングをしていない。実際の予選では距離7km、登距離300m以上、決勝では距離が10kmを越えている。トレーニングキャンプに入ってから体力アップを図ることは不可能にしても、一度くらいは10km程度のポイントOLを行っておくべきであったろうと反省している。

以上がスタッフとしての感想であるが、次に世界選手権そのものの感想を述べておきたい。今回世界選手権を実際に自分の目でみて、また肌で感じ、この大会が世界チャンピオンを決める唯一の大会であることを実感した。僕自身、昨年のワールドカップ第1戦（香港）に選手として参加して世界のトップ選手と同じ舞台を踏んでいるものの、今回の世界選手権は大会の雰囲気は全く違う感じがした。香港のワールドカップは一種のお祭り気分があったが、世界選手権は世界チャンピオンを決める唯一の大会であるという雰囲気があった。選手、役員、運営者すべてが真剣である。観客だけがお祭り気分で見守っている。そしてその世界選手権を実際に体験して、一度でいいから世界チャンピオンを決めるこの大会に選手として参加してみたい、という願望が沸き起こってきている。少なくとも予備セレクションを通過して、本セレクションに参加できるようになりたい。読者の皆様、ご期待ください。

女子コーチとして

山岸 倫也

今回の世界選手権チームは、女子にとって、かなり競技的にめぐまれたものであったと思う。まず、やっと男子並の競争率になったセレクションレース。誰が選手になってもおかしくないナショナルAチームのメンバー達。そして、今までの世界選手権に比較して、徐々にではあるが、向上しつつあるコーチ体制などがあげられる。

さらに、今回は、初めて5人の女子選手が参加したために、個人戦やリレーでリザーブ

にまわる選手が出たことも挙げておこう。これは、選手としての自覚や積極的な動機づけを高める上で、とてもプラスの力を持つものである。また、世界選手権では初めての数十人からなる日本人応援団、彼らが見守る中でのレースは、選手としてとても幸せなものであった。

こうして考えると、今回のチームは準備や環境という点では、今までのどのチームに比べても恵まれていたと思う。コーチである私は、そういった状態を背景に、日本と同じ様なオリエンテーリングができれば個人での40位、リレーでの15位くらいは十分狙えるものと思っていた。そこで、日本と同じオリエンテーリング、つまり、ゆっくりでもいいから確実に進んでいくオリエンテーリングを各選手には指導していた。結果は、数字ではなく各選手の状態を考えるならば、彼女達は十分に目的を達成したといえるだろう。日本と同じ様なオリエンテーリングをスウェーデンの森（といってもかなり大陸的なテラインだが）でうまく実践することができたのである。

しかし、しかし、数字からみた結果はあまりにも厳しいものであった。個人戦での全員予選落ち、個人決勝での新沢の55位（うしろには香港選手しかいなかった）、B-ファイナルでは有村の15位が最高、そしてリレーでのタイムオーバーによる失格……。

コーチの私の思っていたよりも世界のレベルが、それも下位のレベルまでもかなり上昇していたのである。こうなると、もし世界選手権で上位を望むならば、我々は次の段階のオリエンテーリングを目指さなくてはならなくなってしまう。つまり、走力だけでなくあらゆる動作や思考のスピードを上げていかなければならないのである。それには、計画的で日常的なトレーニングをこなしていかなければならないのだが、そういう生活に耐えられる選手がはたして何人いるのだろうか。

視点をかえてみれば、日本のオリエンテーリングでスピードの上がらない原因のひとつには、難しすぎる女子のコース（技術的に難しいと言うよりは単にスピードが出ないようにコースが組まれていると思うのだが）があり、これをもっと簡単にすることなどにより、選手の質・オリエンテーリングの質を変えていくことができると思う。つまり、スピードの出るコースで勝ち残った選手だけが、より難度の高いオリエンテーリングに挑戦していくシステムにすればいいのである。

そうでないと世界選手権で通用するようなスピードのある選手は現れないだろう。

かなり悲観的になってしまったが、まとめることにしよう。今回の世界選手権では選手各自の目標はある程度達成できたのだが、数字として評価を得るようになるためには、かなりの努力と変革が必要である。そして、そういう結果を得るためには現在のオリエンテーリングのやり方では通用しないので、本質的な考え方の変更が必要となる。

## 男子コーチとして

村越 真

「目標は？」と聞かれるたびに、「納得できるレースをすること」と答えることにしていた。過去2回の私たちの成績を振り返ってみればその理由はわかっていただけのだろう。85のオーストラリア、87のフランスと男子チームは2回連続の最下位に甘んじている。それが自分たちの力を出し切ったものなら、納得もできよう。81、83年の2回のWMでは、チームとしての不十分な活動にも関わらず、それなりの結果を残してきた。本格的なチームづくりを始め、それに応じた目標をもって臨んだ結果だけに、過去2回の結果は、チームにとってもそれを支えてくれた人にとっても残念なものだった。自分たちの力を十分に出し切ったレースをし、その結果を見つめてはじめて、次への目標も見えてくる。私たちはいわば長い闇の中にいたのだ。その闇を抜け、進むべき方向に光を見つけ出すこと

こそ、今回の目標だった。それには、自分たちの現状を反映した結果を出すことだ。この目標に向けて2年間チームの活動がおこなわれた。

メンバーが、WMという場で最大限に力を発揮できるようにするためにはどうすればよいのか？ そのためには次の2つの問題をクリアする必要があった。私たち日本チームにとって、長期にわたる遠征をしてWMに備えることは次第に難しくなっている。私たちは日本でWMに備えることを考えなければならない。ヨーロッパのテラインは確かに日本のものとは違う。ちょっとした手抜きが命とりになることも多い。しかし、ヨーロッパでのテクニックは、日本でOLをするときのそれと全く違ったものではない。基本は共通のはずである。それを実際に示し、WMに臨むため、今回のチームは6月以降3回の合宿をおこない、更にエキストラの合宿もおこなっている。メンバーの個人的活動も含めれば、ほぼ毎週なんらかの形でOLに関わっていたことになる。

チームとしての第2の課題は、こうして積み上げられた個人の力をチームとして発揮することである。チームのパフォーマンス、特にリレーのそれは個人の能力をストレートに反映しない。個人とチームの複雑な関係を反映したものになっている。メンバーがチームに居心地の良さを感じ、自分自身の力を十分に発揮できるようなチーム環境が肝要である。今回ほぼ月1回のペースで発行したナショナル・チーム・ブリテン（対象は、最終的に遠征したものを含めて約30人）は、メンバー全員に、チームを身近に感じることの手助けになったと思う。またコーチとしては、メンバーの多くとできるだけコンタクトをとり、メンバーが自分の考えていることをチームに表明しやすい雰囲気づくりを心がけた。不安や緊張はレースにはつきものである。それを素直に表現できない状況こそが一番恐いのだ。

これらの試みが完全に成功したとは言い難い。コーチと選手はまだ兼任している。そのため、時として強力な指導ができない場合もある。選手が基本的な技術に完全に習熟する機会が、十分に生かしきれていなかったような気がする。個人予選での成績は、その点を反映している。基本操作を確実にしていれば、どんなテラインで走っても、大きく崩れることは考えにくいからである。

とはいえ、リレーの結果を見る限りは、男子チームは第一歩は踏み出した。次の目標がどこにあるのか、そのためになにをすればいいのか？ ということもリレーと予選の結果から読み取ることができる。その詳細については、ナショナル・チーム内部に詳しい報告書があるので興味のある方は、ご請求頂きたい。

結果として評価できる部分は肯定的に受け止めるとともに、冷静に結果をみつめ、次の一歩を踏み出してゆきたいものである。

## ヘッドコーチとして

橋 直隆

「大きな疲労感と小さな満足感・・・」前回フランスの報告書の冒頭に私が書いた言葉である。選手誰もが熱い思いを心に秘めた遠征だけに、疲労感はまだしも小さな満足感も耐えがたいものだった。他国との比較という相対的な評価だけではいつまでも満足感を得られないと考え、前回の失敗を繰り返さないため今回は「日頃の力をどの程度出せるか」を大きなテーマとして大会にのぞんだ。そして、日頃の力さえ出せれば相対的にもある程度の結果が出せるものと確信していた。もう少し具体的には、リレーでは落ちこぼれがなく全員（村越は速くて当たり前）のタイムを揃えること、個人では予選の通過ライン付近にできるかたまりに入ることを目標とした。また、個人の結果が悪くても集中心がなくならないよう、後半にあるリレーを重要視していた。

世界選手権の場で日頃の力を出すことは簡単ではない。大会の雰囲気もあるがそれ以上

に海外の慣れないテラインに対する無意識の恐怖心が現れやすいからだ。地図記号が同じでコンパスが北を指しても、この恐怖心を取り去るのは非常に難しい。一般的に女子にこの傾向が強いが、今回は山岸コーチの指導により女子チームには自信のようなものが芽生え、目標はある程度達成できるだろうと思っていた。山岸・村越、両コーチがこの2年間に果してきた役割も大きかったと思う。両コーチを中心にしたチームとしてのまとまりも選手の落ち着きに影響していた。

個人は結果的に村越以外は予選ラインに10分以上離れてしまったが、チームとしてそれほどの精神的な落込みは見られなかった。村越の予選通過で前回の成績を上回ったことによりチームとしての責任を一つ果たしたということもあろうし、勝負はリレーだという気持ちが持続していたことであろう。そのリレーは、男女とも誰も落ちこぼれずにタイムを揃えてきた。女子は厳しいルールによって（閉会式等の都合があったのかもしれない）最後までつなげなかったが、当初の目標から見てある程度評価できる結果であろう。以上のように、自分の力を出すという絶対的な観点からすれば今回のチームは及第点を貰える成果をあげたと考えている。

しかし、他国の選手と比較し相対的な観点からすれば、日本チームはまだまだの成績である。大失敗のない成績だけに、日本の実力を客観的にあらわしていると考えられる。大まかに言って、男子は（村越を除くと）一流選手の130～140%、女子は160%のタイムである。男子で120%女子で130%程度（リレーの一人あたりタイムにして男子が5分以上、女子は10分以上短縮）にならなければ、相対的に満足できる結果は出ないことになる。ミスゼロにすればこれに近いタイムがでるという考えもあろうが、オリエンテーリングにロスタイムはつきもので、ロスタイムなしのレースを選手に期待するわけにはいかない。

やはり、今後の日本選手に求められるのは「走力」であろう。「外国選手に技術で完全に負けたと思ったことはないが、走力については何度も完全に負けたと思った」と経験の多い村越・山岸の両選手が遠征中に話していたのが印象に残っている。走力については前回までの報告書にも必ず書かれていたことだが、個人的な素質と努力によるものが多いせいか、関心はあるものの一種のあきらめに似た気持ちがあり、チームとしてではなく個人的なものとして扱われるだけだったようだ。私のおおまかな推定であるが、ロードで男子は20km70分、女子は10km40分以内の走力を目指す必要があるだろう。これに加えてテライン内の起伏でも粘りきれぬスタミナ（精神的なものも含めて）がなければ、技術があっても世界選手権で通用しないのではないだろうか。

長期的な観点から「足のある選手」が日本代表を目指し代表になるようなバックグラウンドを考える必要を強く感じている。その一つが、日本のオリエンティアの価値観を改めることだ。初心者で(a)地図が読める人と(b)足の速い人を比べた時、 $a > b$ と思いがちである。この考えがOL界に根強くあるため、経験の浅い時期にbが淘汰されてしまっただけではないだろうか。現在の価値観からすれば $a < b$ くらいに考えて、はじめて $a = b$ になるであろう。この価値観がコースセットにも表れる。セッターは「難しい」コースを組もうとし、選手はそのようなコースを歓迎する。これでは、技術の未発達な年齢の若いクラスでは走力があっても自分の技術の低さから興味を失う人も出るであろうし、技術に偏重した考えを持つものも増えよう。スピードの出るコースで走り勝つ経験を多くの若者に与えることが、将来のために必要と考えている。また、これに関してエリート権やクラス分けのシステムも再考する必要があると感じている。

世界選手権が終わったばかりなのに、もう次回が気になる。個々の選手には満足できないものがあるにせよ、私にとって今回は「中程度以上の満足感」があった。次回は大満足以したいと思う。しかし、現在の代表選手に飛躍的向上を求めることは難しい。個々の意

欲あふれるトレーニングによりここまで自分の力を引き出してきているからだ。日本が中堅国の仲間になり最下位の心配なしに戦える日を夢みながら、代表選手を含む中堅選手のおお層の向上と将来の次の世代の選手に期待し、多くのオリエンティアの皆様のご援助と励ましを感謝して報告を終えたい。

# 資料

## 女子個人予選成績表

コース A ( 7050m ↑ 330m 12c )			コース B ( 7210m ↑ 330m 11c )		
1	Marita Skogum	(SWE) 49.27	1	Ragnhild Bratberg	(NOR) 54.57
2	Katalin Olah	(HUN) 52.48	2	Kerstin Haglund	(SWE) 56.07
3	Ada Kucharova	(TCH) 53.09	3	Karin Rabe	(SWE) 56.38
4	Arja Hannus	(SWE) 54.40	4	Jana Galikova	(TCH) 58.13
5	Sabrina Fesseler	(SUI) 55.06	5	Arida Abola	(URS) 58.55
6	Monica Haiten	(NOR) 55.23	6	Ragnhild B. Andersen	(NOR) 59.23
7	Yvette Hague	(GBR) 55.47	7	Annika Viilo	(FIN) 61.07
8	Anne Line Nydal	(NOR) 56.07	8	Eija Koskivaara	(FIN) 61.12
9	Danute Girinskaite	(URS) 56.33	9	Frauke Schmitt	(FRG) 62.39
10	Ulla Manttari	(FIN) 57.31	10	Vroni Konig	(SUI) 62.43
11	Marja Liisa Portin	(FIN) 58.38	11	Frauke Bandixen	(SUI) 62.57
12	Pavlina Genova	(BUL) 60.28	12	Ulrika Ørnhausen	(DEN) 64.13
13	Jana Cieslarova	(TCH) 60.43	13	Christine Marshall	(AUS) 65.46
14	Brigitte Wolf	(SUI) 61.07	14	Ildiko Kovacs	(HUN) 65.55
15	Charlotte Thrane	(DEN) 61.17	15	Jeanine Browne	(NZL) 66.46
16	Olga Cherepanova	(URS) 62.42	16	Irina Namovir	(URS) 66.57
17	Heidrun Finke	(FRG) 64.04	17	Barbel Vitek	(FRG) 67.20
18	Todorka Kamenarova	(BUL) 64.25	17	Roz Clayton	(GBR) 67.20
19	Kerstin Stratz	(FRG) 66.16	19	Lucie Komancova	(TCH) 68.42
20	Jean Ramsden	(GBR) 68.15	20	Agata Czerwinska	(POL) 69.01
21	Dorte Dahl	(DEN) 68.17	21	Anna Gornicka	(POL) 69.06
22	Magali Robert	(CAN) 68.40	22	Louise Fairfax	(AUS) 69.26
23	Odile Haberkorn	(FRA) 69.05	23	Katie Fettes	(NZL) 70.11
24	Nicki Taws	(AUS) 69.21	24	Mariela Chilingirova	(BUL) 70.20
25	Orla Cooke	(IRL) 70.32	25	Peggy Dickison	(USA) 71.47
26	Carey Martin	(NZL) 70.49	26	Wendy Lightfoot	(GBR) 72.26
27	Katja Bonek	(AUT) 71.32	27	Krasimira Chulkova	(BUL) 73.22
28	Katalin Lovasi	(HUN) 72.03	28	Helle Johansen	(DEN) 76.26
29	Alicja Hornik	(POL) 73.37	29	Eilenn Loughman	(IRL) 77.11
30	Heather Smith	(AUS) 74.07	30	Elisabeth Mirouze	(FRA) 80.51
31	Francoise Humblet	(BEL) 74.13	31	Ana Pribakovic	(YUG) 81.10
32	Claudia Kunzel	(AUT) 74.16	32	Deirdre N Challanain	(IRL) 81.50
33	Monika Bajer	(POL) 75.05	33	Marie Violaine Bois	(FRA) 85.58
34	Christine Antoine	(FRA) 76.04	34	Yuko Shinzawa	(JPN) 86.37
35	Sharon Crawford	(USA) 76.21	35	Reka Toth	(HUN) 86.38
36	Avgusta Rupnik	(YUG) 77.13	36	Chieko Arimura	(JPN) 92.00
37	Lena Marion	(YUG) 78.48	37	Anjelika Aschacher	(AUT) 92.02
38	Tania Robinson	(NZL) 79.14	38	Anica Hribar	(YUG) 92.04
39	Sachiko Fukada	(JPN) 82.26	39	Karan Keith	(USA) 94.22
40	Caitriona Nic Muiris	(IRL) 88.32	40	Hedwig Berger	(AUT) 97.07
41	Cristina Vanzo	(ITA) 90.02	41	Vickie Wong	(HKG) 108.51
42	Sanae Kiue	(JPN) 95.08	42	Rita Yung	(HKG) 121.04
43	Judy Dickinson	(USA) 105.56			
44	Ada Lam	(HKG) 106.14			

男子個人予選成績表

コース A ( 11130m ↑ 500m 16c )		コース B ( 11175m ↑ 500m 16c )	
1	Michael Wehlin (SWE) 67.02	1	Hakan Eriksson (SWE) 66.32
2	Kent Olsson (SWE) 67.33	2	Peter Ivars (FIN) 67.48
3	Aigars Leiboms (URS) 67.52	3	Jorgen Martensson (SWE) 68.11
4	Keijo Parkkinen (FIN) 68.00	4	Havard Tveite (NOR) 69.11
5	Rolf Vastre (NOR) 68.49	5	Reijo Mattinen (FIN) 69.35
6	Zoltan Lantos (HUN) 69.53	6	Vladimir Alekseev (URS) 70.10
7	Morten Berglia (NOR) 70.00	7	Petter Thoresen (NOR) 70.17
8	Flemming Jorgensen (DEN) 70.04	8	Janos Kelemen (HUN) 70.56
9	Rasmus φdum (DEN) 70.43	9	Stephen Palmer (GBR) 71.59
10	Jean Daniel Giroux (FRA) 71.28	10	Thomas Nielsen (DEN) 72.44
11	David Peel (GBR) 71.44	11	Jan Eg (DEN) 73.04
12	Steven Hale (GBR) 71.48	12	Gabor Pavlovics (HUN) 73.06
13	Sixten Sild (URS) 71.49	13	Leho Haldna (URS) 73.13
14	Matti Karvonen (FIN) 72.02	14	Manfred Stockmayer (AUT) 73.58
15	Urs Fluhmann (SUI) 72.18	15	Martin Bagness (GBR) 74.30
16	Zdenek Zuzanek (TCH) 72.43	16	Stefan Bolliger (SUI) 75.00
17	Josef Hubacek (TCH) 73.05	17	Slawek Labuzinski (POL) 75.17
17	Andrzej Olech (POL) 73.05	18	Josef Pollak (TCH) 76.03
19	Roland Arbter (AUT) 73.47	19	Roumen Stoimenov (BUL) 76.04
20	Mikell Platt (USA) 74.15	20	Petr Utinek (TCH) 76.25
21	Shin Murakoshi (JPN) 74.37	21	Franz Mareigner (FRA) 78.03
22	Dominik Humbel (SUI) 75.07	22	Ross Burnett (CAN) 78.18
23	Thorsten Lenz (FRG) 75.19	23	Terry Farrell (AUS) 78.56
24	Plamen Djambazov (BUL) 75.24	24	Bruno Haberkorn (FRA) 79.03
25	Mishal Motala (POL) 75.40	25	Christian Aebersold (SUI) 79.27
26	Rob Plowright (AUS) 75.54	26	Jacek Kozlowski (POL) 79.54
27	Robert Nagy (HUN) 76.46	27	Peter Bonek (AUT) 82.02
28	Etienne Bousser (FRA) 77.17	27	Michael Thierolf (FRG) 82.02
29	Ferri Gassner (AUT) 77.24	29	Daniele Sacchet (ITA) 82.09
30	Mile Stevanovic (YUG) 77.52	30	Jock Davis (AUS) 82.15
31	Oliver Foeth (FRG) 77.53	31	Michael Eglinski (USA) 82.22
32	Michael Waddington (CAN) 78.28	32	Oivind Naess (CAN) 82.27
33	Michael Billinghamurst (AUS) 78.47	33	Bojko Stoignov (BUL) 82.34
34	Ted de St. Croix (CAN) 79.04	34	Markus Theissen (FRG) 82.59
34	Mitch Bentley (USA) 79.04	35	Peter Hill (NZL) 84.19
36	Alistair Landels (NZL) 79.10	36	Stephan Vis (BEL) 87.23
37	Raoul Reynders (BEL) 79.15	37	Dave Pruden (USA) 87.52
38	Benny Claus (BEL) 81.52	38	Dario Beltramba (ITA) 87.57
39	Antonio Baccega (ITA) 82.42	39	Steven Linton (IRL) 91.32
40	Robert Jessop (NZL) 84.15	40	Hideo Inaba (JPN) 93.46
41	Denis Dallasanta (ITA) 84.43	41	Rinya Yamagishi (JPN) 94.36
42	Daniel Despodov (BUL) 86.54	42	Brian Corbett (IRL) 95.30
43	Bill Edwards (IRL) 89.12	43	Kevin Ireland (NZL) 97.39
44	Aengus O'cleirigh (IRL) 94.32	44	Slobodan Radovanovic (YUG) 99.20
45	Fujio Takeuchi (JPN) 96.43	45	Ivo Tisljar (YUG) 103.35
46	Ivan Marchiotti (YUG) 99.03	46	Kin-Kwok Lau (HKG) 127.28
47	Amit Weiner (ISR) 103.48	47	Jose Pardo Santalana (ESP) 142.12
48	Shu-Fun Tam (HKG) 124.33		
49	Javier Garin Garcia (ESP) 133.06		
50	Hoi-Chiu Tong (HKG) 137.04		



女子個人決勝成績表 ( 9750m ↑ 390m 15c )

1	Marita Skogum	(SWE)	64.06	29	Olga Cherepanova	(URS)	80.20
2	Jana Galikova	(TCH)	65.30	30	Todorka Kamenarova	(BUL)	81.02
3	Arida Abola	(URS)	68.13	31	Christine Marshall	(AUS)	81.05
4	Ragnhild Bratberg	(NOR)	69.23	32	Kerstin Stratz	(FRG)	81.11
5	Eija Koskivaara	(FIN)	69.45	33	Frauke Schmitt	(FRG)	82.48
6	Ragnhild B. Andersen	(NOR)	69.59	34	Katie Fettes	(NZL)	83.10
7	Karin Rabe	(SWE)	70.08	35	Ulrika ørnhausen	(DEN)	83.50
8	Arja Hannus	(SWE)	70.17	36	Anna Gornicka	(POL)	85.39
9	Ada Kucharova	(TCH)	71.06	37	Jean Ramsden	(GBR)	85.42
10	Monica Haiten	(NOR)	71.12	38	Barbel Vitek	(FRG)	85.45
11	Annika Viilo	(FIN)	71.51	38	Agata Czerwinska	(POL)	85.45
12	Ulla Manttari	(FIN)	72.05	40	Magali Robert	(CAN)	85.53
13	Marja Liisa Portin	(FIN)	72.06	41	Frauke Bandixen	(SUI)	86.13
14	Kerstin Haglund	(SWE)	72.28	42	Orla Cooke	(IRL)	88.10
15	Danute Girinskaite	(URS)	73.09	43	Katja Bonek	(AUT)	88.59
16	Vroni Konig	(SUI)	74.09	43	Roz Clayton	(GBR)	88.59
17	Jana Cieslarova	(TCH)	74.15	45	Odile Haberkorn	(FRA)	91.07
18	Yvette Hague	(GBR)	74.46	46	Katalin Olah	(HUN)	91.20
19	Heidrun Finke	(FRG)	76.50	47	Peggy Dickison	(USA)	95.02
20	Charlotte Thrane	(DEN)	77.43	48	Louise Fairfax	(AUS)	95.08
21	Lucie Komancova	(TCH)	78.26	49	Dorte Dahl	(DEN)	96.03
22	Ildiko Kovacs	(HUN)	78.34	50	Jeanine Browne	(NZL)	96.20
23	Anne Line Nydal	(NOR)	78.40	51	Mariela Chilingirova	(BUL)	96.29
24	Pavlina Genova	(BUL)	79.08	52	Ana Pribakovic	(YUG)	103.54
25	Sabrina Fessler	(SUI)	79.13	53	Cristina Vanzo	(ITA)	105.41
26	Irina Namovir	(URS)	79.21	54	Francoise Humblet	(BEL)	110.27
27	Brigitte Wolf	(SUI)	79.32	55	Yuko Shinzawa	(JPN)	114.47
28	Nicki Taws	(AUS)	79.34	56	Vickie Wong	(HKG)	130.10

B - ファイナル成績表 ( 7650m ↑ 340m 10c )

1	Reka Toth	(HUN)	62.19	16	Katalin Lovasi	(HUN)	83.50
2	Marie Violaine Bois	(FRA)	64.56	17	Hedwig Berger	(AUT)	84.11
3	Alicja Hornik	(POL)	68.22	18	Sanae Kiue	(JPN)	86.35
4	Wendy Lightfoot	(GBR)	69.09	19	Karan Keith	(USA)	87.20
5	Krasimira Chulkova	(BUL)	70.51	20	Claudia Kunzel	(AUT)	87.24
6	Tania Robinson	(NZL)	72.50	21	Heather Smith	(AUS)	88.50
7	Helle Johansen	(DEN)	73.54	22	Sachiko Fukada	(JPN)	89.32
8	Elisabeth Mirouze	(FRA)	75.54	23	Anica Hribar	(YUG)	90.25
9	Eilenn Loughman	(IRL)	76.34	24	Anjelika Aschacher	(AUT)	90.27
10	Sharon Crawford	(USA)	76.42	25	Christine Antoine	(FRA)	93.26
11	Monika Bajer	(POL)	80.06	26	Ada Lam	(HKG)	103.43
12	Deirdre N Chalanain	(IRL)	80.26	27	Judy Dickinson	(USA)	116.17
13	Catriona Nic Muiris	(IRL)	82.34	28	Rita Yung	(HKG)	119.52
14	Avgusta Rupnik	(YUG)	82.55	29	Lena Marion	(YUG)	135.49
15	Chieko Arimura	(JPN)	82.59		Carey Martin	(NZL)	DNS

男子個人決勝成績表 ( 17700m ↑ 680m 24c )

1	Petter Thoresen	(NOR)	96.16	30	Franz Mareigner	(FRA)	112.42
2	Kent Olsson	(SWE)	99.26	31	Flemming Jorgensen	(DEN)	113.06
3	Havard Tveite	(NOR)	99.58	32	Janos Kelemen	(HUN)	113.54
4	Hakan Eriksson	(SWE)	100.04	33	David Peel	(GBR)	113.58
5	Jorgen Martensson	(SWE)	100.23	34	Josef Hubacek	(TCH)	114.08
6	Peter Ivars	(FIN)	100.40	35	Petr Utinek	(TCH)	114.12
7	Vladimir Alekseev	(URS)	101.04	36	Dominik Humbel	(SUI)	114.26
8	Michael Wehlin	(SWE)	101.17	37	Roland Arbter	(AUT)	115.19
9	Reijo Mattinen	(FIN)	101.36	38	Mishal Motala	(POL)	115.39
10	Urs Fluhmann	(SUI)	101.55	39	Matti Karvonen	(FIN)	116.00
11	Rolf Vastre	(NOR)	102.07	40	Roumen Stoimenov	(BUL)	116.44
12	Rasmus φdum	(DEN)	102.11	41	Thomas Nielsen	(DEN)	117.08
13	Thorsten Lenz	(FRG)	103.47	42	Andrzej Olech	(POL)	118.49
14	Sixten Sild	(URS)	104.08	43	Bruno Haberkorn	(FRA)	120.21
15	Steven Hale	(GBR)	104.21	43	Mikell Platt	(USA)	120.21
16	Zdenek Zuzanek	(TCH)	105.14	45	Mile Stevanovic	(YUG)	120.58
17	Josef Pollak	(TCH)	105.22	46	Terry Farrell	(AUS)	121.17
18	Stefan Bolliger	(SUI)	106.14	47	Manfred Stockmayer	(AUT)	123.05
19	Keijo Parkkinen	(FIN)	106.35	48	Shin Murakoshi	(JPN)	127.16
20	Jan Eg	(DEN)	106.53	49	Slawek Labuzinski	(POL)	127.57
21	Stephen Palmer	(GBR)	107.25	50	Plamen Djambazov	(BUL)	129.18
22	Leho Haldna	(URS)	107.29	51	Daniele Sacchet	(ITA)	131.22
23	Gabor Pavlovics	(HUN)	109.33	52	Stephan Vis	(BEL)	132.56
24	Morten Berglia	(NOR)	109.53	53	Peter Hill	(NZL)	140.42
25	Aigars Leiboms	(URS)	109.55	54	Steven Linton	(IRL)	146.22
26	Zoltan Lantos	(HUN)	110.37	55	Ross Burnett	(CAN)	148.09
27	Christian Aebersold	(SUI)	110.41	56	Jose Pardo Santalana	(ESP)	179.47
28	Martin Bagness	(GBR)	111.43	57	Amit Weiner	(ISR)	182.40
29	Jean Daniel Giroux	(FRA)	112.06	58	Kin-Kwok Lau	(HKG)	183.19

B - ファイナル成績表 ( 12575m ↑ 635m 20c )

1	Peter Bonek	(AUT)	87.07	21	Dario Beltramba	(ITA)	103.36
2	Robert Nagy	(HUN)	88.30	22	Rinya Yamagishi	(JPN)	103.47
3	Jacek Kozlowski	(POL)	89.13	23	Kevin Ireland	(NZL)	105.09
4	Bojko Stoignov	(BUL)	92.36	24	Dave Pruden	(USA)	105.21
5	Michael Bilinghurst	(AUS)	93.03	25	Aengus O'cleirigh	(IRL)	105.43
6	Michael Waddington	(CAN)	93.51	26	Fujio Takeuchi	(JPN)	106.43
7	Ted de St. Croix	(CAN)	94.12	27	Denis Dallasanta	(ITA)	106.45
7	Rob Plowright	(AUS)	94.12	28	Slobodan Radovanovic	(YUG)	108.15
9	Jock Davis	(AUS)	94.42	29	Hideo Inaba	(JPN)	109.20
10	Ferri Gassner	(AUT)	95.55	30	Mitch Bentley	(USA)	112.44
11	Raoul Reynders	(BEL)	96.57	31	Brian Corbett	(IRL)	113.07
12	Markus Theissen	(FRG)	97.56	32	Benny Claus	(BEL)	119.18
13	Alistair Landels	(NZL)	98.14	33	Ivan Marchiotti	(YUG)	145.13
14	Bill Edwards	(IRL)	98.44	34	Amador E. Montero	(ESP)	166.53
15	Antonio Baccega	(ITA)	98.50	35	Luis U. Camino	(ESP)	178.54
16	Etienne Bousser	(FRA)	99.01	36	Shu-Fun Tam	(HKG)	203.31
17	Iwan Vis	(BEL)	100.00	37	Hoi-Chiu Tong	(HKG)	205.39
18	Ivo Tisljar	(YUG)	100.41		Javier Garin Garcia	(ESP)	DNF
19	Daniel Despodov	(BUL)	101.34		Oivind Naess	(CAN)	DNF
20	Robert Jessop	(NZL)	103.20		Patrik Ng	(HKG)	DNF

女子リレー成績表 ( 7170-7320m x 4 )

1 スウェーデン (SWE)			
Karin Rabe	54.24	54.21	
Arja Hannus	57.59	112.20	
Kerstin Haglund	56.42	169.02	
Marita Skogum	54.44	223.46	
2 チェコ (TCH)			
Petra Wagnerova	57.24	57.24	
Jana Cieslarova	57.20	114.44	
Ada Kucharova	57.27	172.11	
Jana Galikova	51.50	224.01	
3 フィンランド (FIN)			
Marja Liisa Portin	57.26	57.26	
Ulla Manttari	57.31	114.57	
Annika Viilo	57.11	172.08	
Eija Koskivaara	55.27	227.35	
4 ノルウェー (NOR)			
Ragnhild Bratberg	52.58	52.58	
Ragnhild Andersen	64.39	117.37	
Monica Haiten	59.43	177.20	
Anne Line Nydal	56.47	234.07	
5 ソ連 (URS)			
Ede Umarik	60.20	60.20	
Irina Namovir	58.28	118.48	
Danute Girinskaite	58.25	177.13	
Arida Abola	57.23	234.36	
6 ハンガリー (HUN)			
Andrea Horvath	59.16	59.16	
Katalin Olah	59.20	118.36	
Reka Toth	63.41	182.17	
Ildiko Kovacs	67.02	249.19	
7 スイス (SUI)			
Sabrina Fessler	57.18	57.18	
Cornelia Muller	62.31	119.49	
Frauke Bandixen	64.01	183.50	
Vroni Konig	66.44	250.34	
8 西ドイツ (FRG)			
Barbel Vitek	64.31	64.31	
Heidrun Finke	58.53	123.24	
Kerstin Stratz	71.42	195.06	
Frauke Schmitt	63.49	258.55	
9 デンマーク (DEN)			
Ulrika φrnhausen	61.49	61.49	
Hanne Staugaard	70.48	132.37	
Helle Johansen	71.47	204.24	
Charlotte Thrane	57.39	262.03	
10 イギリス (GBR)			
Roz Clayton	73.21	73.21	
Gill Hale	66.49	140.10	
Jean Ramsden	62.43	202.53	
Yvette Hague	61.48	264.41	
11 オーストラリア (AUS)			
Liz Abbott	71.12	71.12	
Nicki Taws	65.43	136.55	
Christine Marshall	62.00	198.55	
Louise Fairfax	67.36	266.31	
12 ブルガリア (BUL)			
Pavlina Genova	64.23	64.23	
Marie Chilingirova	67.55	132.18	
Todorka Kamenarova	68.17	200.35	
Krasimira Chulkova	68.15	268.50	
13 ポーランド (POL)			
Alicja Hornik	65.40	65.40	
Monika Bajer	65.58	131.38	
Agata Czerwinska	72.19	203.57	
Anna Gornicka	70.42	274.39	
14 ニュージーランド (NZL)			
Katie Fettes	62.24	62.24	
Jeanine Browne	67.43	130.07	
Carey Martin	69.21	199.28	
Jan Davies	79.23	278.51	
15 フランス (FRA)			
Marie V. Bois	65.48	65.48	
Odile Haberkorn	66.28	132.16	
Sonia Rodiere	68.46	201.02	
Elisabeth Mirouze	80.02	281.04	
アイルランド (IRL)		(Disq.)	
Orla Cooke	69.31	69.31	
Eilenn Loughman	74.45	144.16	
Una Creagh	83.45	228.01	
Deirdre Challanain	81.37	(309.38)	
オーストリア (AUT)		(Disq.)	
Silvia Terler	95.29	95.29	
Katja Bonek	66.21	161.50	
Claudia Kunzel	76.56	238.46	
Hedwig Berger	78.53	(317.39)	
ユーゴスラビア (YUG)		(Disq.)	
Avgusta Rupnik	79.57	79.57	
Anica Hribar	96.19	176.16	
Lena Marion	71.31	247.47	
Ana Pribakovic	78.21	(326.08)	
アメリカ (USA)		(Disq.)	
Peggy Dickison	72.28	72.28	
Sharon Crawford	86.12	158.40	
Mary Jo Catterall	83.09	241.49	
Karan Keith	92.29	(334.18)	
日本 (JPN)		(Disq.)	
Yuko Shinzawa	87.31	87.31	
Yuko Izuta	91.37	179.08	
Chieko Arimura	91.**	(270.**)	
Sanae Kiue	-	-	

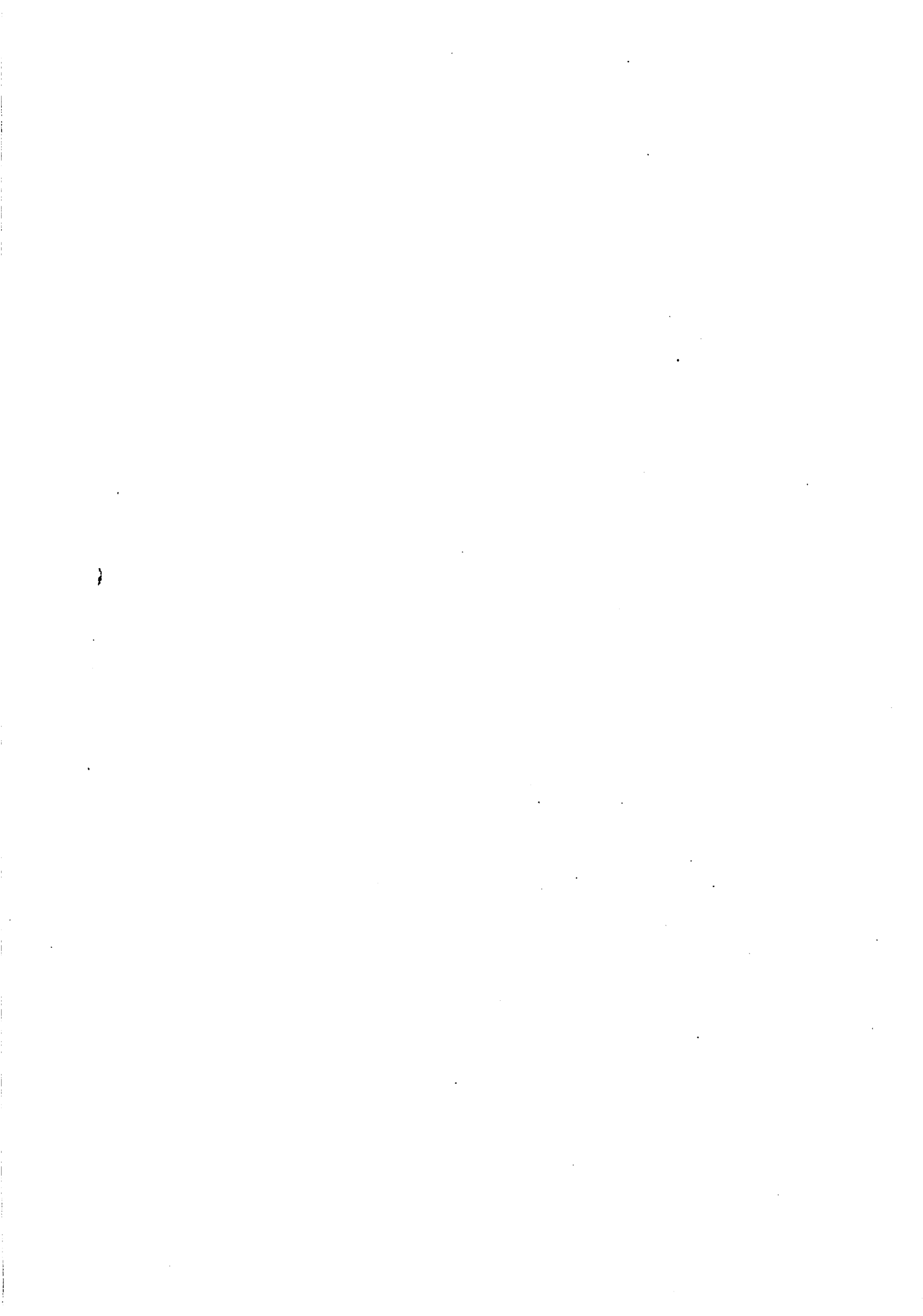
男子リレー成績表 (10295-10470m x 4)

1 ノルウェー (NOR)	10 ブルガリア (BUL)	19 日本 (JPN)
Thon 61.25 61.25	Stoignov 68.56 68.56	Murakoshi 69.09 69.09
Vastre 62.24 123.49	Vasilev 69.09 138.05	Yamagishi 85.55 155.04
Thoresen 60.32 184.21	Stoimenov 66.56 205.01	Inaba 84.25 239.29
Tveite 61.40 246.01	Djambazov 71.06 276.07	Yoshida 87.03 326.32
2 スウェーデン (SWE)	11 西ドイツ (FRG)	20 ユーゴスラビア (YUG)
Olsson 64.37 64.37	Foeth 65.03 65.03	Stevanvic 77.18 77.18
Wehlin 60.06 124.43	Lenz 68.45 133.48	Tisljar 80.26 157.44
Martenson 60.55 185.38	Thierolf 69.46 203.34	Marchioti 98.05 255.49
Eriksson 63.26 249.04	Finkestat 74.17 277.51	Radovanvic 79.36 335.25
3 フィンランド (FIN)	12 イギリス (GBR)	21 ベルギー (BEL)
Parkkinen 61.17 61.17	Palmer 66.24 66.24	I. Vis 81.22 81.22
Kattainen 63.53 125.10	Peel 72.29 138.53	Reynders 80.50 162.12
Ivars 62.34 187.44	Mcintyre 70.02 208.55	S. Vis 84.24 246.36
Mattinen 62.38 250.22	Hale 69.19 278.14	Claus 94.03 340.39
4 ソ連 (URS)	13 オーストリア (AUT)	22 アイルランド (IRL)
Sild 66.39 66.39	Bonek 70.30 70.30	O' Cleiri 80.15 80.15
Haldna 62.35 129.14	Brantner 67.37 138.07	Corbett 99.03 179.18
Leiboms 61.59 191.13	Arbter 69.46 207.53	O' Haloran 85.49 265.07
Alekseev 62.01 253.14	Stokmayer 71.06 278.59	Linton 94.04 359.11
5 スイス (SUI)	14 ポーランド (POL)	スペイン (ESP) (Disq.)
Humbel 67.52 67.52	Labzinski 71.16 71.16	Garcia 100.45 104.45
Bolliger 61.13 129.05	Kozlowski 71.08 142.24	Pardo 109.40 214.25
Aebersold 61.45 190.50	Olech 80.35 222.59	Montero 118.17 332.42
Fluhmann 65.32 256.22	Motala 71.32 294.31	Camino ***.** (**.**)
6 チェコ (TCH)	15 イタリア (ITA)	香港 (HKG) (Disq.)
Vavrys 65.20 65.20	Baccega 72.13 72.13	K-K Lau 128.15 128.15
Hubacek 63.50 129.10	Sacchet 77.29 149.42	S-F Tam 123.34 251.49
Pollak 62.06 191.16	Beltramba 72.59 222.41	H-C Tong ***.** (**.**)
Zuzanek 67.14 258.30	Pradel 74.37 297.18	P. Ng - - - -
7 デンマーク (DEN)	16 アメリカ (USA)	フランス (FRA) (Disq.)
φ dum 64.35 64.35	Platt 71.38 71.38	Bousser 69.42 69.42
Jorgensen 67.52 132.27	Eglinski 74.24 146.02	Haberkorn (Punch Miss)
Jan Eg 65.27 197.54	Bentley 79.06 225.08	Mareigner - - - -
Mogensen 65.57 263.51	Weyman 77.51 302.59	Giroux - - - -
8 ハンガリー (HUN)	17 カナダ (CAN)	
Benedek 70.19 70.19	Wadington 76.22 76.22	
Pavlovics 65.05 135.24	St. Croix 72.05 148.27	
Kelemen 67.35 202.59	Burnett 76.04 224.31	
Lantos 66.28 269.27	Naess 84.46 309.17	
9 オーストラリア (AUS)	18 ニュージーランド (NZL)	
Plowright 67.53 67.53	Landels 68.32 68.32	
Blinghust 69.03 136.56	Jessop 82.53 151.25	
Farrell 68.54 205.50	Hill 75.25 226.50	
Davis 69.44 275.34	Ireland 94.07 320.57	

リレー途中経過（数字は積算タイム・単位は分）

	1 走	2 走	3 走	4 走
女子				
1	NOR (52)	SWE (112)	SWE (169)	SWE (223)
2	SWE (54)	TCH (114)	FIN (172)	TCH (224)
3	SUI (57)	FIN (114)	TCH (172)	FIN (227)
4	TCH (57)	NOR (117)	URS (177)	NOR (234)
5	FIN (57)	HUN (118)	NOR (177)	URS (234)
6	HUN (59)	URS (118)	HUN (182)	HUN (249)
7	URS (60)	SUI (119)	SUI (183)	SUI (250)
8	DEN (61)	FRG (123)	FRG (195)	FRG (258)
9	NZL (62)	NZL (130)	AUS (198)	DEN (262)
10	BUL (64)	POL (131)	NZL (199)	GBR (264)
11	FRG (64)	FRA (132)	BUL (200)	AUS (266)
12	POL (65)	BUL (132)	FRA (201)	BUL (268)
13	FRA (65)	DEN (132)	GBR (202)	POL (274)
14	IRL (69)	AUS (136)	POL (203)	NZL (278)
15	AUS (71)	GBR (140)	DEN (204)	FRA (281)
16	USA (72)	IRL (144)	IRL (228)	IRL (309)
17	GBR (73)	USA (158)	AUT (238)	AUT (317)
18	YUG (79)	AUT (161)	USA (241)	YUG (326)
19	JPN (87)	YUG (176)	YUG (247)	USA (334)
20	AUT (95)	JPN (179)	JPN (270)	***

	1 走	2 走	3 走	4 走
男子				
1	FIN (61)	NOR (123)	NOR (184)	NOR (246)
2	NOR (61)	SWE (124)	SWE (185)	SWE (249)
3	DEN (64)	FIN (125)	FIN (187)	FIN (250)
4	SWE (64)	SUI (129)	SUI (190)	URS (253)
5	FRG (65)	TCH (129)	URS (191)	SUI (256)
6	TCH (65)	URS (129)	TCH (191)	TCH (258)
7	GBR (66)	DEN (132)	DEN (197)	DEN (263)
8	URS (66)	FRG (133)	HUN (202)	HUN (269)
9	SUI (67)	HUN (135)	FRG (203)	AUS (275)
10	AUS (67)	AUS (136)	BUL (205)	BUL (276)
11	NZL (68)	BUL (138)	AUS (205)	FRG (277)
12	BUL (68)	AUT (138)	AUT (207)	GBR (278)
13	JPN (69)	GBR (138)	GBR (208)	AUT (278)
14	FRA (69)	POL (142)	ITA (222)	POL (294)
15	HUN (70)	USA (146)	POL (222)	ITA (297)
16	AUT (70)	CAN (148)	CAN (224)	USA (302)
17	POL (71)	ITA (149)	USA (225)	CAN (309)
18	USA (71)	NZL (151)	NZL (226)	NZL (320)
19	ITA (72)	JPN (155)	JPN (239)	JPN (326)
20	CAN (76)	YUG (157)	BEL (246)	YUG (335)
21	YUG (77)	BEL (162)	YUG (255)	BEL (340)
22	IRL (80)	IRL (179)	IRL (265)	IRL (359)
23	BEL (81)	ESP (214)	ESP (332)	ESP (***)
24	ESP (100)	HKG (251)	HKG (***)	***
25	HKG (128)	[ FRA Pena ]	***	***



第13回世界オリエンテーリング

選手権大会報告書

1989年10月

発行・編集責任者 橘 直隆

茨城県つくば市松代 4-407-105

TEL 0298-55-1799

印刷所 株式会社 イセブ

茨城県つくば市天久保 2-11-20

TEL 0298-51-2515